



290  
503

5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18

始



特114  
118



文學博士  
駒澤大學  
教授  
新井無二郎著

中住  
友實修書

大正  
15. 6. 4  
内交

東京  
三菱出版社

## 序

今の世の中には可なり立派な位置に居る人で、文の書けない人もある。文は自己の意思を發表する所以であるのに、それが出來ないとは情ないことでは無いか。美的名文を書くことは別として、思ふことだけを書けないといふのは、啞者同然である。又同じ書くなら、成るべく立派に美しく書ければ、尙更結構なことである。學校の先生達が、作文教授に骨を折られるのもそれが爲で、本書の如き作文書の出るのも亦それが爲である。文の書けると書けないでは、處世上大變な得失がある。學校の答案を始として、各種の登用試験、それから役向の手紙でも、趣意書でも、同じ意見があつても、書けなければそれだけ、書いても上手に出來て居れば亦それだけの利益がある。凡そ學校で習ふ學科の中で、これ程生涯役に立つて、これ程生涯其の運命を支

配するものは無い。然るに先生の骨を折る割合には、生徒はそれ程に思はぬ。好きな者は喜んで書くが、嫌ひなものは一向書かぬ。

嫌ひなのは出来ないから嫌ひなのである。少し出来るやうになれば、忽ち好きになるのは何事でもさうである。今日の中學などの學科は、數があまり多くて時間が足りない。先生がいくら骨折つても、生徒が興味を起すまでに至らぬのではあるまいか。それ等の爲には、本書のやうなものによつて、生徒の自習を奨励したら、どうであらう。日本人の紳士程、文の書けないのは、世界中にあるまいと思ふ。

芳賀矢一

しるす

### 緒言

學生の作文に苦めるは、程度の高下をとはず、一般に認むる所なり。されども別に之を匡救すべき良法の行はれたるを聞かず。僅に一時間に足らざる時間を以て、思想を纏め文字を按排せむとするは、能文の士といへども猶難しとする所、況んや文字の知識と思想の構成とに乏しき中等學生の作文問題に對して茫然爲す所を知らざる者の多きは、蓋當然のこと、いふべし。世に作文教科書といふものあり。尤も便利なるに似たれども、概して法則を説くこと詳密にして、適當の作例と、適當の課題とに至りては、甚、尠く、生徒をして益々作文の困難なるを思はしむること多し。是に於て教師は教科書を用ゐず、題を出し、題意の

説明を與ふ。かくする時は短時間は益々短時間となりて、殆、四十分内外の時間にて、下書きも清書もせざるべからず。故に作文の時は、いつも休息時間を犠牲にして、纔に課を充たすに至るを常とす。かくして好結果を奏せむことの覺束なきは、いふまでもなかるべし。

思ふに學生の要求する所は、適當なる作例と課題と、課題に對する參考とにあるべし。則、作例によつて文章の美妙を味ひ、作例類似の課題に對して著想を起し、參考の語句若しくは説明に由つて筆路の圓滑を計るにあり。本書の目的は、聊、この點に就いて貢獻し、作文を實際に修めしめむとするにあり。

然れどもこの書倉卒のうち成れるを以て、猶適應せざるもの多かるべし。そは更に版を重ねて漸次改竄を期せむとす。

本書は、第一編より第五編に至るといへども、尙繁簡宜しきを得ずして、一篇の文にして二篇に入れて可なるものあるべく、三篇の文にして二篇に適當なるもあるべし。そは監督者若しくは讀者の、各自取捨選擇せられむことを望む。

本書は毎編大體を春夏秋冬の季節に分ち、その間各種の文例及び文題を與へたり。讀者その心して見たまへかし。

著者識

# 中等作文實修書目次

## 第一編

教師に入學を報ず	.....	一
中學校に入學の手續を問合す	.....	二
友人に入學の手續を問合す	.....	三
右の返事	.....	九
人の住所を問合す	.....	〇
右の返事	.....	〇
口語と文語	.....	一
口語體を文語體に改めて見ます	.....	二
文語體を口語體に改めて見ます	.....	四
敬語	.....	五
獨語體	.....	七
對話體	.....	七
花時の雨	.....	八
暮春	.....	八
初めて鶯を聞く(課題)	.....	九

目次

我在りし小學校(課題)	.....	一九
ホルソンの銅像	.....	二〇
楠公の銅像(課題)	.....	二一
椿	.....	二二
農家の夏	.....	二三
田園日記	.....	二四
昨日の日記(課題)	.....	二五
日比谷公園の夜景	.....	二六
靖國神社神苑の初夏(課題)	.....	二七
協同の力	.....	二八
毛利元就諸子を戒む(課題)	.....	二九
故郷の産物(課題)	.....	三〇
買物を頼む(課題)	.....	三一
轉居を報ず(課題)	.....	三二
第一學期(課題)	.....	三三
病氣見舞(課題)	.....	三三
届書を書く(課題)	.....	三四

犬の殉死(課題)……………三四  
 入學後の状況を報ず(課題)……………三五  
 農家の秋……………三六  
 秋の田……………三七  
 秋の山(課題)……………三七  
 書窓の秋……………三八  
 夜の書窓(課題)……………三八  
 柿を贈る(課題)……………三九  
 同返書(課題)……………四〇  
 旅行中の注意……………四〇  
 旅行のためのしめ(課題)……………四一  
 海の景色(課題)……………四二  
 忘れ物を届く(課題)……………四三  
 雨の夜友を招く(課題)……………四三  
 右の返書(課題)……………四四  
 農家の冬……………四四  
 落葉(課題)……………四五  
 初雪……………四六  
 冬の水田(課題)……………四八  
 早起(課題)……………四九

筆記を借りにやる(課題)……………五〇  
 同返事(課題)……………五一  
 菊花を贈る(課題)……………五一  
 右の返書(課題)……………五二  
 雪の景色(課題)……………五二  
 動物園……………五三  
 上野の動物園(課題)……………五四  
 上野の博物館(課題)……………五五  
 上野の帝展を見る(課題)……………五六  
 英人と旅行(課題)……………五六  
 附録(句讀法)……………五七  
 (送假名法)……………五八

第二編

春の朝……………六三  
 春の夕(課題)……………六三  
 軍紀……………六四  
 作例二……………六五  
 作例三……………六六  
 兵營の規率と習慣……………六七

菊を買ひたる返事……………六八  
 初織を祝ふ……………七一  
 春季休業中旅行に誘ふ(課題)……………七一  
 右の返事(課題)……………七二  
 夏の庭……………七三  
 雨中の庭(課題)……………七三  
 朝顔……………七四  
 朝顔の鉢を買ふ(課題)……………七五  
 物を買ひたる禮状(課題)……………七六  
 我家(課題)……………七六  
 時の價值(課題)……………七七  
 綠陰幽草……………七七  
 暑中の快樂(課題)……………七九  
 修業法(課題)……………八〇  
 廣瀬中佐の最後(課題)……………八一  
 水泳に誘ふ……………八二  
 右の返事(課題)……………八三  
 秋になりぬ……………八四  
 彼岸花……………八四  
 秋の山里(課題)……………八五

秋の夕ぐれ……………八六  
 書籍の買入れをたのむ(課題)……………八七  
 暴風見舞(課題)……………八七  
 右の返事(課題)……………八八  
 松茸を贈る……………八八  
 右の返書……………八九  
 栗を贈る(課題)……………九〇  
 香魚を贈る(課題)……………九〇  
 英國ハイド公園……………九〇  
 上野公園(課題)……………九二  
 猫を寄ふ説……………九三  
 獵犬を寄ふ説(課題)……………九四  
 慈悲心(課題)……………九四  
 秋の暮……………九五  
 修學旅行中の樂しかりし事ども(課題)……………九六  
 東京市の交通機關(課題)……………九六  
 出水見舞……………九六  
 火災見舞(課題)……………九七  
 入替を報ず……………九八  
 入替を報はれたる返事(課題)……………九八

冬の夕……………九九  
 冬の夜(課題)……………九九  
 冬の日記……………一〇〇  
 冬の月曜と火曜との日記(課題)……………一〇二  
 正直は最良の方便……………一〇二  
 成功と失敗(課題)……………一〇四  
 市民と兵士……………一〇五  
 日露の役に我軍の勝ちし最大理由(課題)……………一〇六  
 敬字先生(課題)……………一〇六  
 謙信給(課題)……………一〇七  
 慈悲濟人(課題)……………一〇八  
 油斷大敵(課題)……………一〇九  
 憎き物……………一〇九  
 卑しきもの(課題)……………一一〇  
 歸る子供……………一一一  
 遊べる子供(課題)……………一一一  
 郷里の小學校に物品を寄贈す(課題)……………一一一  
 野菜をおくる(課題)……………一一二  
 右の返書(課題)……………一一三  
 同窓會不參の通知(課題)……………一一三

第三編

旅行と植物……………一四  
 修學旅行第一日の見聞(課題)……………一六  
 水村……………一六  
 春の水……………一七  
 初春の山里(課題)……………一七  
 雨(課題)……………一八  
 公共事業……………一九  
 公衆衛生(課題)……………一九  
 按摩……………二〇  
 値踏み(課題)……………二一  
 曉起の記(課題)……………二二  
 洋行問合せ(課題)……………二二  
 右の返事(課題)……………二五  
 注文を受けし返事(課題)……………二六  
 人の寶……………二七  
 廉潔(課題)……………二八  
 小金井に花を観る……………三一  
 小金井の櫻(課題)……………三一

雨後の春色……………三三  
 初夏の雨後(課題)……………三五  
 遠洋漁業(課題)……………三六  
 旅行の樂(課題)……………三七  
 獨立心……………三八  
 獨立心なき者の結果は如何(課題)……………四〇  
 候文の慣用語及び慣用字……………四〇  
 候文の認め方……………五〇  
 梅見に人を誘ふ……………五一  
 返事……………五二  
 隱宅之花を贈る……………五二  
 右答文……………五三  
 寒氣見舞之文……………五三  
 悔狀……………五五  
 暑中見舞……………五六  
 盜難見舞……………五七  
 雨の日友の許に……………五七  
 朋友……………五八  
 親友の必要……………五九  
 病後……………六〇

冷水浴(課題)……………六二  
 山の美……………六三  
 富士山(課題)……………六五  
 全國大競漕會の記……………六六  
 我校の水陸運動會(課題)……………六九  
 苗代……………七一  
 勤勉なる農夫(課題)……………七一  
 神戸……………七二  
 横濱(課題)……………七三  
 夏なき里……………七五  
 箱根塔の澤(課題)……………七六  
 船に殉せる船長……………七八  
 責任(課題)……………八〇  
 近藤守重(課題)……………八二  
 海の歌(課題)……………八二  
 門(課題)……………八三  
 海水浴場なる父に物をおくる(課題)……………八四  
 海水浴場より兄の許に(課題)……………八五  
 裝を贈る(課題)……………八五  
 秋の心……………八六



秋の山中……………一八七  
 秋の夜(課題)……………一八九  
 大新聞と小新聞……………一九〇  
 自家撞着……………一九一  
 新聞紙(課題)……………一九三  
 博物館及動物園(課題)……………一九四  
 喬木の類……………一九五  
 喬木の濫伐を惜む(課題)……………一九八  
 長壽法(課題)……………一九九  
 京都の秋……………二〇〇  
 紅葉……………二〇二  
 修學旅行の記(課題)……………二〇五  
 塞翁の馬……………二〇七  
 案内を受けし人に謝す(課題)……………二〇七  
 土産の禮(課題)……………二〇八  
 歸宅を問合す文(課題)……………二〇九  
 雪の日……………二一〇  
 雪のけしき(課題)……………二一一  
 寒星……………二一一  
 巴里の冬(課題)……………二一四

六正×年を送る……………二一七  
 梅……………二一八  
 椿……………二一八  
 新柳(課題)……………二二〇  
 水晶宮(課題)……………二二〇  
 梅見に誘ふ(課題)……………二二一  
 物の價……………二二二  
 人の力(課題)……………二二四  
 水の力(課題)……………二二四

第四編

都の春……………二二五  
 千里の春……………二二五  
 花候……………二二八  
 春の日曜(課題)……………二三〇  
 獨逸人と英國人……………二三〇  
 成功は不屈の人に存す(課題)……………二三二  
 勇猛心の必要(課題)……………二三二  
 青年はつとめて困難と戦へ(課題)……………二三二  
 匈牙利……………二三四

吾國體の尊嚴(課題)……………二三六  
 俳句……………二三七  
 舒明天色望國の時の御製歌……………二三八  
 和歌(課題)……………二四〇  
 登山は志を大にす……………二四二  
 海上の快感(課題)……………二四三  
 希望(課題)……………二四五  
 自警の辭……………二四九  
 自己の短所(課題)……………二五〇  
 旅の心得……………二五一  
 旅行中の失敗談(課題)……………二五四  
 愛郷心……………二五五  
 愛國心(課題)……………二五七  
 初夏……………二五八  
 二坪の庭……………二六〇  
 夏の朝……………二六〇  
 鬼子母神……………二六一  
 香田(課題)……………二六二  
 公園散歩を誘ふ(課題)……………二六三  
 不在……………二六三

不在中の來客に(課題)……………二六四  
 谷一平……………二六五  
 我郷の篤行家(課題)……………二六七  
 通信交通の機關……………二六八  
 郵便と文明(課題)……………二七〇  
 徒步旅行(課題)……………二七〇  
 西洋の公園……………二七二  
 健全なる青年の娛樂場(課題)……………二七三  
 紳士錄……………二七四  
 卑劣なる行爲(課題)……………二七五  
 近郊の秋色……………二七五  
 勞働(課題)……………二七九  
 儉約(課題)……………二八〇  
 文章の波瀾……………二八一  
 人生の波瀾(課題)……………二八二  
 明治時代の文學……………二八二  
 福澤先生の事業(課題)……………二八五  
 晚秋初冬……………二八五  
 霜……………二八八  
 大根……………二九〇

青物市(課題)……………二九一  
 火事見舞(課題)……………二九一  
 右の返事(課題)……………二九二  
 瑞西の山水……………二九三  
 國民性……………二九五  
 日本と支那……………二九七  
 我國民の長所と短所(課題)……………二九八  
 上杉謙信……………二九八  
 高山彦九郎(課題)……………二九九  
 火のそば……………二九九  
 夏を受業と冬を受業(課題)……………三〇〇  
 除夜……………三〇一  
 年のはじめ人のもとに……………三〇二  
 餅搗き(課題)……………三〇二  
 歳暮の市中(課題)……………三〇三  
 我家の元旦(課題)……………三〇三  
 冬季休業(課題)……………三〇三  
 技藝教育新書の編者……………三〇五

第五編

平和の戦争(課題)……………三〇六  
 堪忍(課題)……………三〇六  
 憤怒(課題)……………三〇八  
 獄中より父兄の許に(課題)……………三〇九  
 偉人の感化(課題)……………三一二  
 彼岸……………三一二  
 山中の花水……………三一四  
 根岸守信……………三一五  
 迷信(課題)……………三一六  
 農學校開校式の祝辭……………三一六  
 商業學校開校式の祝辭(課題)……………三一八  
 土耳其海峡の美景……………三一八  
 瀬戸内海(課題)……………三一九  
 雨嵐漫言……………三二〇  
 五月雨(課題)……………三二二  
 夏の樂……………三二二  
 都部の利害(課題)……………三二四  
 軍艦旗(課題)……………三二四  
 夏季の學生……………三二五  
 登山の快……………三二九

夏季に於ける青年の精神修養(課題)……………三三一  
 飛行機の發達(課題)……………三三二  
 夕涼みよくそ男に生れたる(課題)……………三三二  
 時鳥願の出されぬ格子かな(課題)……………三三二  
 むつとしてみどれば庭に柳かな(課題)……………三三二  
 一葉の舟……………三三二  
 航海中の娛樂(課題)……………三三五  
 那波道圖……………三三五  
 忠告(課題)……………三三六  
 雨後の田家……………三三六  
 羅馬の古今……………三三八  
 東京の節句……………三三九  
 海水浴……………三三九  
 海水浴の效用(課題)……………三四一  
 旅順追憶……………三四三  
 三典の歌(課題)……………三四五  
 誅辭……………三四六  
 亡友を思ふ(課題)……………三四八  
 亡友の父に送る(課題)……………三四八  
 秋の朝……………三四八

月のゆふべ(課題)……………三四九  
 倫敦と巴里との比較……………三四九  
 東京と京都との比較(課題)……………三五一  
 喇叭……………三五一  
 喇叭の趣味……………三五二  
 我好める音楽(課題)……………三五二  
 少時の敏腕を以ては將來を卜し難し……………三五五  
 偶成……………三五七  
 航海……………三五七  
 海國民の責任(課題)……………三六〇  
 銅像……………三六〇  
 廣瀬中佐の銅像(課題)……………三六二  
 一時雨……………三六二  
 冰柱……………三六三  
 英國の新聞……………三六三  
 新聞記者の資格(課題)……………三六五  
 維新前の言論界と今日(課題)……………三六五  
 事務の才幹……………三六六  
 事務の敏速(課題)……………三六六  
 原田龜太郎遺像記(課題)……………三六九

學習院卒業式答辭(課題).....	三七〇
卒業生を送る祝辭(課題).....	三七一
我等の前途(課題).....	三七二
書籍の選擇.....	三七二
我が愛讀書(課題).....	三七三
うらめしの雪.....	三七四
亡友の傳(課題).....	三八五
亡兄の傳(課題).....	三八五
義俠的精神とは何ぞや(課題).....	三八七
精神.....	三八八
元氣と卑風(課題).....	三九〇
活眼を開いて活書を読み(課題).....	三九一
空中飛行界の前途(課題).....	三九一

### 中等作文實修書目次終

### 中等作文實修書第一編

新井無二郎著

#### 【舊師に入學を報ず】

作例

私は去る一日當地に著きまして、直に某中學校の選抜試験に  
 應じましたところ、幸合格いたしました。第八番の成績で、本日入  
 學を許されました。これも全く先生の御薫陶をうけたおかげ  
 だと感謝いたします。とりあへず御報知をいたします。餘  
 のことは又追々に申しあげます。

第一編

藤岡(徳)ヲ以テミ  
チビク)

【中學校に入學の手續を問合す】

作例

貴校の入學手續が不明でありますから、御多忙中誠に恐れ入りますけれども、規則書一葉至急御届けを願ひます。就いては、二錢郵券を封入いたしておきます。

【友人に入學の手續を問合す】

作例

今年は餘程暖かで、當地は既に櫻も咲きかけてきました。定めし御健康で、學年試験の御準備に御急がしいこと、存じます。私も今年から貴中學校に入學いたしたい考へであります。

の手續が不明でありますから、御手数をかけて相済みませんが、校則や寄宿費等を御問合せのうへ、御知らせを願はれますまいか。どうぞよろしく御依頼いたします。

【右の返事】

作例

益々御勉強御結構にぞんじます。御たづねになりました、當中學への入學手續は、直様聞きおはせました所、今年に入學志望者が非常に多くて、募集人員を超過するので、讀書・作文・習字・算術の學科について、選抜試験を行ふ筈だそうです。その御つもりで御準備を願ひます。手續や寄宿費のことは、封入の規則書に書いてありますから、それを御覽の上御承知下さい。

右の書簡文は口語體であります。古來の習慣として、一般に候文體といふものが行はれてをりますから、その書き方も知らねばなりません。候といふ字が澤山に使つてあるから、候文といふのです。口語を候文の用語に直す時は、さつと左の様な風になります。

承知いたします。承知いたし候。

承知いたしました。承知いたし候ひき。

参上いたしませう。参上いたし候はひ。

差支へが有りますならば。差支へ候はば。

差支へ候へば。差支へ候ふにつき。

差支へが有りますから。差支へが有りますによつて。

差支へ候ふ間。

差支へ候ふま。

差支へ候ふ條。

差支へ候ふにより。

差支へが有りますけれども。

差支へ候へども。

差支へ候へど。

御無沙汰をいたしました。御無沙汰いたし候ふ處。  
沙汰いたし候ひし處と、過去にいふべきを、かく現在のやうにいふなり。

出發をいたしました。出發いたし候ひしに。

御無事でありますか。御無事に候ふや。

出發いたし候はず。御無事に候ふか。

出發いたしませぬ

出發いたさず候

御伺ひいたしましたさうな

御伺ひいたし候ふ由いたし候ひし由と過去にいたふべきをかく現在  
御伺ひいたし候ふ趣同上

注意

候はゞ候はむ候ひしに候ふ處など候の下に續く文字ある時は、語尾を「はひふ」の如く書く方がよいが、出發いたさず候の如く、言の切れた時には、語尾を書かないでよろしい。

例一

嚴寒の時節でございまするが。

嚴寒の候に御座候ふ處。

例二

暖くなつてきましたか。

春暖相備し候ふ處。

例三

葉櫻の蔭が氣持のよいころとなりました。

葉櫻の蔭心地よき頃と相成り候。

例四

毎日曇つてゐて、いつ霽れるかわかりません。

連日かき曇り、いつ霽るべしとも見えず候。

例五

暑さがたまりません所が、今日の夕立であつさも無くなりましてた。

酷暑堪へがたく候ふ處、本日驟雨一過のため、苦熱を洗ひ去り申し候。



一寸御尋ね申し候。唯今佐藤益雄君に手紙を差出すべく、相認め候ふ所、ふと町名番地を失念致し、いかにも思ひ出されず候。若し御存じに候は、御聞かせ下されたく、願ひわけ候。草々。

【右の返事】

小生も、手控へはいたしをらず候へども、確に本郷區彌生町二番地は、十七號と記憶いたしをり候。右御即答まで。頓首  
右のやうな形式にて、前に示した、舊師に入學を報ず、「中學校に入學の手續を問合せ」、「友人に入學の手續を問合せ」、「同返事」の口語體を、候文體に改作して見給へ。

口語と文語

既に前の書簡文の所で示した通りに、話詞をそのまま、文字にあらはすのを口語體といひ、古代から用ゐてきた文章語で書くのを、文語體といふのです。今日ではまだ文語體の方が、口語體よりも廣く行はれてゐますから、口語を文語にかへてあらはすことに、餘程熟練しておかねばなりません。

口語體を文語體に改めて見ます

例 一

是等の勝地は、皆とりくくの趣を備へて居て、何れを何れともいひ難いが、しかし規模の大なることは、恐らく日光が第一であらう。

是等の勝地は、皆各自の趣を備へたれど、何れを勝れりとも定めがた



し。されど規模の大なるに至りては、恐くは日光を以て第一とすべからむ。

例二

私どもの兄弟姉妹は、幼少の時から貧乏の味を嘗め盡して、母の苦勞した様子を見ても、生涯忘れられませぬ。

余の兄弟姉妹は、幼時より貧苦のうちに育ちて萬難を味ひ、母の辛勞せしさまを見たるにつけても、生涯忘るゝこと能はず。

文語體を口語體に改めて見ます

例一

此話、その信僞は知らねども、以て深く世人を警むるに足る。

この話は、信か僞かは知らないけれども、世人を警めるには甚だ十分であ

ある。

例二

暫くして、雲散じ雷をさまれば、山嶺の白雲日に輝いて皚々たり。

しばらくして、雲がなくななり、雷がやまると、山の絶頂の白雪は、日に照されて眞白である。

例三

秋草は已に錦を織り、冷風はそよるに秋を覚えしむ。

秋草はもはや錦のやうに赤くなり、冷たい風はおほえず秋の心地をさせる。

例四

世にいくぢなき者を稱して「腰脱け」といふ。言卑俚なりと雖

味ふべし。それ腰は人身の要なり。肩に要なければ、肩體をなさず。腰に力なければ五體崩れて姿勢見るべからず。精神の懈怠この時より甚だしきはなし。

世にいくぢのないう者のことを、腰脱けといふのである。下品な言てはあるが味ふ値打がある。腰は人の要のやうな者である。肩に要がなければ、肩がぼろ／＼になつて了ふ。それと同様に、腰に力がなければ五體が崩れて、姿勢が見られないやうになる。従つて精神が緩みだらけるのは、この時よりひどいことはない。

### 敬語

我々國民の間に用ゐらるゝ言語には、敬語といふ者が甚だ重んぜられてゐます。それで若しこの敬語に注意しなかつたな

ら、到底圓滿な交際をすることは出来ませぬ。そして文章の上にもこの敬語をあらはします。口語體の文章には、敬語を用ゐる場合と、用ゐない場合とがあります。それはおもに、對話體に書く時は敬語を用ゐ、獨語體に書く時は用ゐませぬ。敬語のあるなしに關らず、すべて口語體の文には、野卑な語や一地方の方言を書いてはなりません。

### 獨語體

例一

森林はちよつと見ると、漁業に關係もないやうであるが、少し考へて見ると、その密接の關係があることがよくわかる。一體山に森林があると、その木の種類が何であつても、雨がふれば、木

の葉や枝に雨が支へられるから、降つた雨の全量が、谿川へは流れこまずして、一部は地の中に吸ひ込まれ、木の根に吸はれるから、餘程の量が一時そこに止るわけであつて、雨がなくても、朝夕の露や何かで、その地が常に濕うて居るから、絶えず源泉を養ふわけである。(岡村金太郎)

## 例二

一人で居るものは、一人だけの快樂、一人だけの道徳があり、二人で居るものは、二人だけの愉快、二人だけの徳義がなくてはならぬものである。西洋人は、共同生活で、居る家も共同、食ふ物も共同、遊ぶ處も共同といふ風だから、何事も、公共的に出來て居ると共に、公共道徳が、その必要の上から、大に備つて居る。(池邊義興)

## 對話體

## 例一

## 英國の花見時

日本の櫻時といふと、一年で最も賑かな時ですが、英國にも斯ういふ時季があります。必ずしも花が咲くからといふのではないが、この時節になると、英國中何處へ行つても賑かです。従つて外の國から英國見物に行く者も、成べく此時季を見計らつて行くやうにします。といふのは、英國の花といはれる倫敦が、此頃になると、彼の鬱陶しい霧も晴れて、何と無く居心地がよい。それは五月六月から、七月の上旬、この七十日間に限つてゐます。

(少年世界讀本)

## 【花時の雨】

閑人（ヒマノアル人）

左の文を、おほよそ、二倍位の長さに、言を加へて見たまへ。  
降ると見えて、車は母衣かけたり。苔の桃には恵みなれども、  
盛の櫻には情なし。樓上に碁を圍む閑人には良友なれども、一  
年の生計を立つる餅商人には怨敵なるべし。（大和田建樹）

【暮 春】

作 例

病やや間あり。枝にすがりて手のひらほどの小庭を徘徊す。  
日、うらゝかに照して、鳥空を飛ぶ。ここちよきこといはひかた  
なし。二三本の小松は緑伸びて、凌雲の勢をあらはし、一尺ばか  
りの薔薇は苔ふくれて、一點の朱唇を見る。秋草は、わづかに芽  
を出して、いまだ萩とも桔梗とも知らぬに、一もとの紫羅傘は、已

に一輪の白花をひらく。雨後、土未だかわかぬ處に、さゝやかな  
る蟲のうごめくは、これも命あればなるべし。（正岡子規）

課題 【初めて鶯を聞く】

口語體に作  
りなさい。

考

梅の花も漸く苔んだばかり。裏の小池には午前中は氷もと  
けない。〇とかくまだ火鉢のへりがこひしい。〇朝早く息を煙  
のやうに白く吹き出しながら、例の如く登校する。〇某侯爵の  
横手の垣根の内に、小高い森がある。〇ほうーほけきよと清く  
涼しく美はしい一聲がきこえた。〇俄に春のきた心地がした。

課題 【我在りし小學校】

口語體に作  
りなさい。

- 1 位置
- 2 校舎の模様
- 3 運動場の光景
- 4 先生と生徒の
- 数
- 5 在學中に感じたこと。

【ネルソンの銅像】

作 例

倫敦の市中少し目貫の處には、大抵銅像が立つてゐるが、中にもネルソンの銅像が最も立派です。場所は、此將軍の最後の戦を記念するためにトラファルガーの戦場と名づけてあつて、市中でも稍西寄りの商店よりは役所などの多い處です。高さ四十四メートルの雲衝くばかりの石の大圓柱の上に、像が据ゑてある。像は其當時佛國から分捕つた

大砲で鑄たもので、下から見ても能くは見えない位に高い。臺石の四隅に大きな獅子の像が置いてあるが、此獅子の出來榮亦尋常ならず。英國の今日あるは、全くネルソンの御蔭であるけれども、これを記念するにも、亦奮發したものだと思心されます。此ネルソン銅像から少し離れて、ゴルドン將軍の像もあります。併し、此像にはなりません。尙、ウオートローの戦で、奈烈翁を打敗したウキリントンの像が、英蘭銀行の前に据ゑてある。これも中々大したものです。(少年世界讀本)

課題 【楠公の銅像】

左に記した材料を使つて文語體に作りなさい。出來るだけ簡短にするがよろしい。

参 考

宮城御門外の芝原に建設されてある。○勢盛んな馬に、鍔形の冑を著、鎧の袖を風に吹き靡かし、鎧をふんばり、手綱をひきしぼり、威風凛々たる有様である。○此の圖案は、美術學校の選定で鑄造は岡崎雪聲氏の手に成つた。○明治二十三年四月木型の細工に著手した。○奈良の大佛は大作ではあるが、坐像で、附屬物も尠いから造りよいけれど、これは騎馬で武装で、いろ／＼附屬物が多くあるので鑄るのに非常に困難である。○明治二十六年、米國シカゴ府に世界博覽會が開かれた。岡崎氏は奮發わざ／＼同會に赴いて、英佛獨伊等より出品の傑作を視察した。○ニューヨーク鑄銅會社出品の華盛頓の立像は特に同氏に研究の材料を與へた。○かくて七年の歳月を費し、非常の苦心の結果宮城門外に、皇室の鎮護として儼

然屹立することゝなつたのである。岡崎氏の苦心は、公の銅像と共に永く後世に傳はるであらう。(關根正直氏の文に據る)

課題 【椿】

左の文を口語體に改作したまへ。

山路を埋めて椿の散りたるいと嬉し。五重の塔ともいふらひやうに、竹の枝などにさし集むるもあり。目白といふ鳥に、甘き汁を吸はせむとて、拾ひ歸るもあり、枝ながら取らむとて、木に登りたるに、散らさむとて、草深き上に心して投げ落すを、取り上げつゝ、苔を敷ふるもあり。我故郷は山近ければ、かゝる遊びこそ常なりしか。(大和田建樹)

いふらむやうに  
ハハハハハハハハハハ  
思ハハハハハハハハハハ  
ニシ

常なりしか(常ア  
アツタマア)

【農家の夏】

作例

新樹の緑深く、梅の實漸く熟せむとする頃は、苗代の苗已に成長し、小さき手を以て人を招くに似たり。これより時候梅雨に入り、一年最も陰鬱なる季節といはるれども、農家に取っては植附の時にして、雨は實に甘露なり。家々の男女各、小綺麗なる衣服に著換へ、若き女は、赤き襷をかけ、新しき手拭を冠り、列を成して苗を植う。田植歌の聲流るゝが如し。植ふ終りて水をせき入れたる景は、正にこれ一大花園なり。此の時麥已に熟して、雲雀の聲は轉居を急ぐものに似たり。盛夏の田の草取は、農業中の最も苦しき者なれども、家に歸りて行水を使ひ、夕食を終へ、夕顔棚の下すゝみをなすときは、涼風特に快く、晝間の勞苦を償ひて

樂しさは夕顔棚の下涼み、男はててら妻はふたのして(出所不明)東北の方言に襦袢をテトラと云ふ。女の下帯は多く二幅にて作るゆゑ、フメノと云へり。

餘あり。(新保榮次)

【田園日記】

作例

九月一日 朝いと涼し。曇勝ちなる空より日影節々漏る。風なし。今日は誠に結構な二百十日で、垣ごしに鄰の人挨拶す。梨畑に棚を造る。竹を截り索を結び午に至りて成る。午後玉蜀黍を引く。夜に入りて雨。  
 二日 曇。裏山につくつくはうしの聲かまびすし。小藪の中なる棗の實の漸く色づきたるを、悪太郎ども謀りて取らむとす。午後三時を霧る。蜜蜂の巢を窺ふに出入忙はし。茄子の畠を打ち返して、葱畠一うねを作る。夕方西北の風。

三日 曉より雨降る。友を訪ひて薄暮に歸る。雨やむ。蟲の聲とみにさわがし。

四日 陰晴定まらず。雲に殺氣あり。この朝殊に冷かなるを覺ゆ。ウオシントン傳を讀む。理想の偉人なるべしと思ふ。雨驟に降り出で、また忽ちやむ。畑に出でて草を抜き、韭を移し植う。一株毎に白き花咲きたり。

五日 陰曆八朔。舊例によりて餅搗きて祝ふ。小雨しとしと降る。晝過ぎやうく、霽れたれば松原に散歩す。

六日 終日雨。畑のものも庭のものも皆腐り果つる心地す。風なし。(阪本四方太)

課題 【昨日の日記】 文語體

考

日附、天氣、起床時間、登校の時間、學科(感じたこと)歸宅の時間、歸宅後の、動靜、出來事、就床時間等。

【日比谷公園の夜景】

作例

イルミネーションの點ぜられた昨夜の日比谷公園は、雨後の躑躅の花にも葉にも雫した上、花間を多くの花燈籠が彩つてゐた。初夏の夜の眺め殊に美しいので、人出頗る多く、二つの四阿も共同腰掛も、肩と肩と擦れ合ふばかりに、花のぐるりは押し返すほどの雑沓であつた。(萬朝報)



課題 【靖國神社神苑の初夏】

左の材料を用ゐて、文語體に書いて見たまへ。

葉櫻の涼しげに茂つてゆく様は、花時にもまして心地がよい。  
 ○若楓や藤の若葉の薄緑した中に、四阿があつて、その腰掛から池を見おろした景色が絶佳である。○銅作の金時が鯉を抱いてゐる。その鯉の口からは盛んな噴水が飛び出てる。處々の岩の上には石龜が背を日に曝して眠つてをり、鯉は大きな口をあいて、少年少女が投げてやる麩の處に集まつてくる。○青々とした翠色は水に映り、人も顔も青く見える。  
 ○日露の戦利品や、旅順で露艦の砲撃に我威力を示した二十八瓏巨砲の周圍には、東京見物の老人と、孫らしい子供とが見とれてゐる。

【協同の力】

作例

余は嘗て伊太利の塑像師が製作したる、五六歳の小童と小女とが相與に水鉢の一端を推して、これを傾けつゝある塑像を見たりき。その下に題字あり。いはく「合すれば強をなす」と。余はまた途上にて、しばしば二人の車力が偶然ある坂下に出會ひて、互に相推し、相助けて、やすやすと二個の車臺をば順次に坂上に運ぶを見たりき。  
 これともに、われ等がよき教訓にあらざるや。(徳富猪一郎)

課題 【毛利元就諸子を戒む】

左の事實を文語體に作りなさい。

元就の病が危篤の時、諸子を呼びよせ、箭數本を取り出して、その子の數と同じにし、これを一束として極力折らんとしたが、折ることができない。だが一本づつにして折れば苦もなく折れた。そこで戒めていふには、兄弟はこの箭の通りだ。仲よくすれば事が成就し、仲がわるいと皆々亡びてしまふ。この事を忘れてはならぬというた。その時次子隆景が進み出て、兄弟の争はとかく欲から起る。欲を忘れて義といふことを大切に思へば、仲がわるくなることはありませんまい、といった。元就聞いて悦んで皆仲兄さんの言に従ふがよいと申しました。

課題 【故郷の産物】

口語體

参考

山のものか、川のものか、海からか、畠からか、どんな田舎でも、何か産物のない所はありませぬ。何でもよいから、その種類、效能、産出高、評判等を書いて見たまへ。

課題 【買物を頼む】

候文體

参考

○久しく御無音 ○其後御かはりも ○病母と當温泉にきてをりませす ○山間の瘠村のことで ○母子の對話より外に ○無聊の雑誌 ○郵便局もない ○代金は暫時。

課題 【轉居を報ず】

□の所には漢字、○の所には假名を補うてください。

拜啓都合により、□○表記の場所に□□□□。それがために、今日學校を休み候。明日曜は終日片付の□□を命ぜられ□□。かゝる折には兄弟なき身は□細き□○□。いづれ明後月曜には學校○○□□○○□□○○○○□。

課題 【第一學期】 文語體

參考

學生の第一學期は、恰も農家の夏の時季に似てゐる。第一學期を終へて二學期に入る時は、櫻の花がちつて、若葉の出る時でおひくくと藤の花も咲き、郭公もきて鳴き、新緑は深緑とな

つて、裕は單に、羅紗帽子は、麥稈帽子に替り、だんくと暑くなつてゆくのである。日は長し、心氣は壯快で、勉強には最上の好時季といはねばならぬ。若しこの學期に於て、運動や遊技の方にのみ熱中して、學問を怠つたなら、その結果はどうなるであらう。一學期だから、まだ二學期も三學期もあると油斷をして、うかくと過したなら、とりかへしのつかぬ悪成績に終るであらう。百姓が盛夏の田の草取に負けてゐるやうでは、決して愉快な結果は得られない。

課題 【病氣見舞】

左の文句はわざと順序がちがへてあります。順序を都合よく正しく候文に書いて見たまへ。

暑さの折の病氣は○大分長いので○日に増し御快方に○その後の御容態は○ゆる／＼氣長に○あせるは病のために○御全快○一日も早く○愉快なる正月を○お互に○昨日確に○御依頼の學校への届書は。

課題 【届書を頼む】

これも「病氣見舞」と同様の方法にして。

参考

心も心ならず○急電に接し○只今○實兄大病○兎に角○五日間缺席の豫定○出發○歸京の期も○別紙届書よろしく○主任の先生に○口頭でも。

課題 【犬の殉死】

左の文を出来るだけ短縮して見たまへ。

静岡縣小笠原郡山中村にお米といふ老婆あり。性質魯鈍にて、少しの財産を居食して仕舞ひ、遂に乞食となり、山の中腹に小屋を作りて雨露を凌ぎけるが、此老婆常に三匹の犬を飼ひ、己が貰ひし僅の食物を頒ち、子の如くに愛し、犬も其恩に感じ、まめ／＼しくお米に仕へ居たりしに、お米は先程より病氣に罹り、遂にその小屋内にて餓死せしが、其死體を發見せし人の話に、一匹の犬は老婆の脇の下に頭をさし入れ、一匹は股の間に臥したるまゝ、餓死し居り、他の一匹は枕許に坐りて、これ亦息絶々にて、涙を垂れ居たりといふ。實に昔物語の如き話ならずや。(萬朝報)

課題 【入學後の状況を報ず】

候文體

- 1 安否
- 2 通學の道程
- 3 新しき友人
- 4 教室、運動場の様子
- 5 歸宅後の現状
- 6 我無事なること

### 【農家の秋】

作例

秋は淋しきものと歌はるれど、農家のためには一年の黄金時代なり。丹精したる稻は熟して黄雲十里といふべく、稻を刈る人背に負ふ人、落穂を拾ふ雀まで忙しく嬉しげなり。今日は東隣、明日は西隣と、豊作を祝ひて互に相招き、酔へる顔は門前の柿と赤さを争へり。(新保繁次)

煙(烟草ノコト)  
田づら(田面ノ意)

### 【秋の田】

作例

鎌を手にして立てる父、刈りたるをたばねて脊おふ娘、あたらしき藁をむしろに煙ふきつゝ、やすむ夫、土瓶かた手に晝飯はこぶとていそぐ妻、見わたせば田づらの秋こそゆたかなれ。家に主人なし。庭鳥三つ四つ呼びかはしつゝ、菊ある垣のもとにて、こぼれたる米をついばむ。(大和田建樹)

### 課題 【秋の山】

文語體に

参考

紅葉・松茸・椎栗・柿など、眺めもおもしろく、ひろふも、探すも、もぐ

もさまざまに楽しきは秋の山である。

【書窓の秋】

作例

わが庵も亦秋の光景には洩れざりけり。喉鳴き破るばかりの鶇のこゑ、高き梢に聞ゆるに、窓ひらきて、そこかここかとうち見れば、そこにもあらず、ここにもあらず。窓を閉ぢて書をひらけば、一層高く聞ゆるなり。鳥の聲ぞと聞けば鳥の聲なり。秋の聲ぞと聞けば、おもしろさ讀書の類にあらず。(北村透谷)

課題 【夜の書窓】

文語體

考

書窓から眺めた月夜の景色でも、雨夜の有様でも、風のあれてる有様でも、蟲のないてゐることでも、又秋には限らず、冬の夜のことでも、春の夜のことでもよろしい。面白く感じたことでも、いやに感じたことでも。

課題 【柿を贈る】

左の口語體を候文體に改めなさい。

これは、今年はじめてなつた庭内の柿でございます。見かけはこのやうによくありませぬけれど、味はさほどわるくありません。御笑味なされたらうへで、御口にかなひましたならば、いつにても御出でなされて、御もぎとり下さい。

課題 【同返事】

前と同様に

只今は、御珍めづりしき柿を澤山下され、まことにありがたく頂戴いたしました。弟は、とりわけ大よろこびで、握りきれぬ大きなのを胸にかゝへて座敷中をかけまはつてをります。御言に甘あまへ、そのうち参上いたしませう。とりあへず御禮ばかりを申しあげます。

【旅行中の注意】

作例

予は旅行する時には、常に小形こがたの丁度ちやうどポケットに入る位の

大きさのノートを持つて行く。そして其れに行く途々で出會つたこと、感じたことを、其の時、其の場所で、何時なんじとか、何處どこの河を渡つた時とか、何處どこの森を見た時とか、として必ずつける。人の話を聞いた時にも、面白いことがあれば其の座でつける。景色の次に談話があり、次にまた景色があらうが、そんな順序は構はない。因よゝにいふが、畫えの描かける者なら畫を、歌・俳句の出来るものなら、歌・俳句を書きつけて置くがよい。(山崎直方)

課題 【旅行のたのしみ】 口語體

参考

旅行といへば、修學旅行でも、歸省でも、遊覽でも皆旅行である。汽車旅行・徒歩旅行・汽船の旅行いづれでもよろしい。その最

も楽しかつたことを書いて御覧なさい。

課題 【海の景色】 文語體

参考

海ほど壯快なものはない。天氣のよい時は短艇に乗つて遊  
びまはるも、小船で釣を垂れるも、沙干に貝を拾ふも皆おもしろい。島の松の枝ぶり、巖に白鷗の群れてゐる様、白帆の和船のゆきゝするさま、まるで繪のやう。しかし一旦風が荒れると、船は岩にうちつけられ、波は島を呑みこむばかり、ごうごうともの凄い音がして、岸をうち、松の根を洗ひ、漁船の一つ、人の一人も、影も形も見ることとはできない。その變化の甚しいことは、實に驚くべきものがある。

課題 【忘れ物を届く】

左の口語文を候文體に改めなさい。

昨夜は、むりに御ひきとめして、失禮致しました。御かへりの後に、この手帳が立關に落ちてゐたことに氣がつきましたから、すぐさま弟にもたせて御届けいたします。

課題 【雨の夜友を招く】

同上

折角の日曜も朝からの雨で、外出もできず退屈でたまらぬところ、をりよく賜暇で歸つてゐた従弟がきて、旅順攻圍の實戰談をはじめてをります。御用事がなくばすぐに來給へ。君



の好物の餅もやけてをります。

課題 【右の返事】

同上

雨夜の退屈で、欠伸の連發にたまりかね、今二三頁の筆記をすましてから、寢床にでももぐらうと思つてゐる折柄のことで、こんな嬉しいことはありませぬ。大急ぎで筆記を終つてから、すぐに参上いたします。

【農家の冬】

作例

冬は收穫已に終り、残れるは大根引なり。太郎が引く力あま

りて、うしろに轉ぶもをかし。繩をなひ薪を集め、澤庵を漬けて、専ら來年の用意をなす。

屋外風寒く雪白けれど、内には糶火の影赤く、一家爐を圍みて、銀杏を焼く子供あり。母の膝に眠る小兒あり。澁茶をすする老父あり。斯かる田園の樂みは、都の人の夢にも見ざる所なるべし。  
(新保繁次)

課題 【落葉】 文體隨意

一葉落ちて天下の秋を知る。○曉に雨のふると思つたのは、落葉の音であつた。○梧桐の葉も、紅葉の葉も、椎の葉も皆落ちてしまつて、寂しい枯木の庭に變つた。○面倒でもあるし、

又却つて風流の心地もするので、そのまゝにしておくと、霜の白うそのうへに置いた朝の景色は、おもしろいものである。

○村の賤の女は、山麓の落葉をかいて竈をたく材料とし、朝學校に通ふ小學の兒童等は、かき集めて焚火とする。○山蔭を牽かれて行く牛や馬は、白い息を吹き出して歩んでゐるに、朝日をうけた落葉のうへに、小犬は暖かそうにねてゐる。○夕方に、彼方こなたに煙の立つてゐるのも落葉をたくのである。

○小供らが、手柄顔に納屋の内に山のやうに積んでゐるのは、やがて晚餐後岩見重太郎武勇傳の話の折に、圍爐裏の材料となつて、焼けた栗はその中から拾ひ出されるのである。

【初雪】

作例

朝の風一しほつめたく、空には雲のゆき、あわたしく霞も降り來ぬべき景色なり。空は一面に曇る。風いよよよつめたし。

堅き霰に交りて鹽の様なる雪はらららと枝をうつ。暫くはさらららと音たてゝ、をやみなく降る。こまかき雪、瓦屋根をうち、飛石の上をはねて、庭中に散り布く。

此の音暫くにして止み、燈籠の屋根、杭のかしら、垣の結目など、綿を著けたる様になる。地も一面に白く、樹々の枝皆満開の花を著く。青き松は重げに枝を垂れ、南天の實はいよよ赤し。稍、小降りとなる。窓さきに雀の聲聞え、笹の雪折々すべる。雪全く止む。空の雲だんらん晴れて、薄日の光洩れ、野も山も目

來ぬべき(キソウナ)

をやみなく(スコシモヤマズ)

も覺さひるやうに鮮あまなり。鳥の聲高き窓にきこゆ。  
 空全く晴る。日影一しほまばゆし。松の枝はおのづとはね  
 あがり、軒の雫ここかしこより垂る。庭の雪は犬の足より消え  
 そめて、野も山もやがてもとの姿となる。風なほ寒し。(坪内雄藏)

課題 【冬の水田】 文語體

●考

遙か右手は山の麓、左手は町といふも名ばかりの瘠村の裏手、  
 前方は松並木の街道まで、ずつと見渡したところ、一面の水田  
 で、その中にうねうねとした暇道が通じてゐる。水面には薄氷  
 がはりつめて、そのうへを松並木の方から吹いてくる風は、稻  
 刈の時百姓が立てておいた竹の先きに、ヒウヒウ音をさせて、

その寒さは骨の底まで滲みこむやうである。田の畦の枯草  
 は、霜柱のために土と共に浮きあがつてゐる。豆腐箱を左手  
 に、酒德利を右手に、ぶらぶら買つて歸る小供が一人見えるば  
 かり、外には通行するものもない。柿の木の梢に百舌鳥がキ  
 イ〜と活潑にないてゐて、親子兄弟一家總出で、牛や馬に至  
 るまで、稻の收穫に忙はしかつた秋の暮の光景が、かうも寂し  
 くなるものかと思つてゐると、右手の山の枯木に鳥が氣も滅  
 入るやうな聲でなき出した。

課題 【早起】

左の文を口語體に改めたまへ。

毎朝五時に起くる時は、七時に目を覺す人よりも、一日の中に

二時間の得ありて、一年間には七百三十時間の得となるべし。もしこれを五十年間につもれば、實に三萬六千五百時間の大きい得となるべし。

朝早く起くるは、時間の得となるのみならず、精神身體ともに壯健になりて、其の務むべき業も大いにはかゆくものなり。故に古人も早起は家を起す基なりといへり。

されど、又いたづらに早起するのみにて、日高くなるまで顔も洗はず、髪も梳らず。うかゝとして何事をも勉めず、時を過ぎむには早起のかひはなかるべし。されば人は、朝早く起き出で、暇を惜みて、それ〴〵事に従ふべし。(帝國女子讀本)

課題 【筆記を借りにやる】 口語體

参考

歴史の筆記帳〇淨書〇鉛筆の堅かりしため〇文字の跡〇判然せず〇二三箇所〇不明〇當惑〇困却〇只今〇おあき〇御差支なくば〇拜借〇小僧を遣し。

課題 【同返事】 口語體

参考

小生のも〇怪しき書きかた〇御役に立つや否や〇御間に合ふや否や〇兎に角〇御渡し。

課題 【菊花を贈る】 候文體

参考

前略御高免○手植の菊花一枝○昨今漸く咲き初め○色香少く候へども○黄と白と二枝○御插花の料にもと○今一週も致し候はゞ○咲き揃ひ○御來觀を願ひ度と。

課題 【右の返事】

候文體

参考

御丹精の菊花○殊に初咲との御事○誠に御見事○何よりも有難く○早速花瓶に活け○清賞仕るべく○いつもながら○御手際の程○感服。

課題 【雪の景色】

文體は隨意

参考

○きたない家も白銀の臺と見え○花のない松の枝も、葉のなき木々の梢も○美しさは、たとへるものもない○空が晴れて朝日が輝き出でたころ○雪が消えはじめて、ぐづれ落ちるさまもおもしろい。○月の光が残らず野山を照す時、雪が月に映つて不夜城の様である○軒端の雨垂が氷柱となつてかゝり、小池の面に氷の閉ぢたのも美しい。○犬がうれしさうに、ころびまはつてゐる。近所の小供も一緒になつてゐる。

【動物園】

作例

(二)まだ見ぬ國の動物を

集めて見する園のうち

印度の獅子も朝鮮の  
 牙かみいだし口を張り  
 (二)孔雀は翼うちひろげ  
 赤きいたいき白き衣  
 み山の奥の荒鷲も  
 (三)くらき石段下りゆく  
 ひれふる鯛の隣には  
 玻璃のなくば手をのべて

虎も晝に見し形して  
 一聲吼ゆるものすこさ  
 誇るか人にわがみえを  
 鶴とはあれよ水飲むは  
 里にかはるゝ世の恵み  
 水族館の室のうち  
 横はふ蟹もおもしろや  
 つかみて見たやあの魚を

(新編教育唱歌集)

課題 【上野の動物園】

文體隨意

参考

東西の動物、大は象・虎・獅子・熊・駱駝・駝鳥・大蛇・鰐等より、小は栗鼠・針鼠・鼯鼠・雀・鷓鴣に至るまで、禽獸・鱗介數百千種を集め、東西萬邦の寒帶熱帶各地に互る動物を網羅してゐる。婦人小兒の目を慰むるに第一番である。

課題 【上野の博物館】 同上

参考

博物館の門は、舊時の寛永寺の中門で、門内は方今帝國博物館の大建築となり、内外古今の歴史的美術品、製作品、天産人工のあらゆる物品を網羅して陳列し、唯ずん／＼見て歩くばかりで半日以上を費さればならぬほどである。

課題 【上野の帝展を見る】 同上

課題 【英人と旅行】

左の口語體を文語體に改めなさい

昔から、英吉利人の最も好きなものは、旅行と田舎と運動だといはれましたが、今も其通りです。暇さへあると、年中英吉利人は旅行をして居る。世界中英語が用ゐられるやうになつたのは、英吉利人が旅行をして蒔いて歩いたのだとまでいはれる位、實に英吉利人は旅行が好きなのです。(小年世界讀本)

# 附録

## 句讀法

語句のきれるか、續くかを明かにして、文意の混雜を防ぎ、且つ讀み口調を調へんがために句讀點を施す。

○ 句きり又は句點といふ。語句の意の止まる所に附す。朗讀の際には此にて聲を切るべし。

● 讀みきりといふ。語句の中止する所、又は長き語句の讀み口調を良くすべき所に附す。朗讀の際には短く聲を切るべし。

● 讀點と名づく。同格なる單語の重なるとき、其の各語を分別するため各語の間に附す。

┌ 引用語又は敘言等を仕切る括弧なり。既に仕切れる引用語又

は敘言の中に更に引用語・敘言等あるときは、之を仕切るに「」を以てす。  
 一段落の終りが、行の末に及びたるるとき、次の段と區別せんがため、に其の行末に附す。  
 書翰文には句讀點を附せず、之に代ふるに、字間に少しく間隔をつくり、或は墨つぎに注意して、受信者の讀み易からんことを期す。

### 送假名法

漢字と假名とを配合するには、假名の分量宜しきを得ざるべからず。送假名の法は人により時によりて差あれども、自ら一定し置くべし。大略、左の方法によるを便とす。

- 一 **名詞** 本來の名詞には假名を送らず。形容詞より轉成せる名詞には語尾を送る。高さ・嬉しさ・重み等の如し。動詞より轉成せる名詞には、紛れ易きもののみ其の語尾を送る。用ゐる方

### 二

生れはいづこ 等の如し。  
**代名詞** 代名詞には通常送假名を附せず。但、兩様に用ひらるゝものは便宜之を送る。我が大日本帝國 彼れ我れに及ばず等の如し。

### 三 四

**數詞** 一つより九つまでのつ を送る。  
**動詞** 動詞は語尾の變化する所より送り。熟語動詞も之に準ず。想ひ起す 集り來る 等の如し。されど慣用上誤讀の憂なきものは送らず。打過ぎ 届出づ の ち け を送らざるの類是なり。

### 五

**形容詞** 本來の形容詞は語尾を送る。動詞より轉成せる形容詞は、動詞の語尾の一音より送る。願はし 望ましけれ 等の如し。

### 六

**助動詞及助詞** 助動詞と助詞とは總て假名にて書くべし。也 哉 乎 等の字を用ゐるべからず。但、如し 給ふ



可し等は漢字を用ゐるも妨げなし。又、金子百圓也の也な  
どはこの限りにあらず。

七

**副詞** 本來の副詞は左の二項に由る。

一、誤讀の憂なきものは送らず。

例、只 尙 且 昔 今

二、讀みがたき憂あるものは語尾の一音若しくは二音を送る。

例、故らに 争てか 寧ろ 將に

名詞と助詞とより成れる副詞は其の助詞を送り、動詞・形容詞より  
轉成せる副詞は其の語尾より送る。誠に 實に 丁寧に 始め  
て 美しく 等の如し。慣用上、語尾を省くもあり。總て 由て  
の如き是なり。

八

**接續詞**

接續詞は 而して 然らば 然れば 然らざれば  
等の外、假名を送らずして譯點を附す。又、且、等の如し。就中

加之、所謂 等は全部假名にて書くも良し。及 是動詞の例に従

右の外、尙例外のもの有るべし。時に臨んで宜しきに従ふべし。

ひて び を送るも可なり。

中等作文實修書 第二編

【春の朝】

作例

鶯しきりに鳴くは、うしろの藪なるべし。起き出づる頃は、春の霜半消えて、日影はや庭にあり。寝心地のよき頃にもなれるかな。豆腐賣る聲は、今門をぞ過ぐる。(大和田建樹)

課題 【春の夕】

右の作例に倣ひて、小品文を書いて見たまへ。但し文語體に。

参考

夕刊新聞は早くも本日の花観の景況を報ずる。○電車はど

れもくかへりの花見客を満載してゐる。○郊外を見ると、  
 麥島の間をぞろくかへつてくる。○花の小枝を手にして  
 ゐるのも、花を帽子に挿んでゐるのも、瓢を肩にしてゐるのも、  
 いろく異様の風をしてゐるのもある。○雲雀のこゑはま  
 だ聞えてゐるが、夕日にかすんで影は見えない。○寺の門前  
 の櫻の花が、ひらくと静に散つてゐる。○小川に花瓣が流  
 れてゐる。○暮鐘の響きと共に、二ひら三ひら静に花がちる。

【軍紀】

作例

軍紀とは、軍隊の紀律をいふ。軍紀の整ふと否とは、軍隊に非  
 常なる関係あるものなり。軍紀の整ふとは、下の者は上の者に

服従し、上の者は下の者を統べ率ゐ、ともに軍隊の規則を堅  
 く守りて、秩序の正しきをいふ。若し軍紀整はずして、下のもの  
 従順ならず、上の威權行はれざるときは、各人の精神および舉動  
 みな區々となりて、少しも統一するところなく、随つて軍隊の威  
 嚴品格を失ふに至らむ。斯くの如き軍隊は、假令幾百萬人あり  
 とも、いはゆる鳥合の衆に過ぎずして、何等の用をも爲さるべ  
 し。上下一體となり、百千萬の人々心を一にし、一號令の下に歩  
 調を揃へて進退せざれば、到底戦争に勝つ能はざるべし。

【作例一】

右の文章を短縮せるもの

軍紀とは、軍隊の紀律をいふ。軍紀の整ふと否とは、軍隊に至  
 大の関係有す。軍紀の整ふとは、下は上に服従し、上は下を統

率し、各自軍規を嚴守して、秩序整然たるをいふ。若し軍紀整はずして、下從順を缺き、上威權なきときは、各人の精神及び舉動は區々統一するところなく、隨ひて軍隊の威嚴と品格とを失ふに至らむ。斯くの如き軍隊は、假令幾百萬人ありとも、國家の用に立ちがたかるべし。上下一體、各自一心、號令一下、進退度にかなふにあらざれば、畢竟戰勝を期すべからざるべし。

## 【作例三】

前文を一層短縮せるもの。

軍隊の紀律を軍紀といふ。軍紀の整否は軍隊の強弱を示す。服従と統率と並び行はれ、軍規と秩序との嚴正なるは、軍紀の整へるなり。もし從順と威權と共に行はれず。各人の精神舉動の區々なる時は、軍隊は毫も威嚴品格を保たざるべし。かかる

軍隊は假令百萬の衆ありとも、國事に任へがたからむ。上下一體、各自一心、進退度に當らざれば、畢に勝を制する能はざるべし。

## 【兵營の規率と習慣】

左の文を前の例に倣ひて短縮したまへ。

兵營には嚴重なる規率ありて、起床・點呼・食事・就寢など、皆喇叭の響によりて合圖せらる。其の他一舉一動悉く規率を以て束縛せられ、慣れぬ間は、全く自由を失へる如く思ひて、不平を洩すものもありといふ。されども、それは入營前にだらしなき生活をなし居りて、急に生活の有様の變れるがためにして、月日を経るに従ひ、自然に之に慣れ、又其の中に愉快を感ずるやうになるものなり。

【笥を貫ひたる返事】

作例

御書面并に見事なる竹の子御心に掛けさせられ(被爲掛)態々御おくり下され(被下)今に始めぬ深き御志千萬あり難く(難有)存じたてまつり候(奉存候)。かゝる紫の牛の角めきたるものゝ土もちあげて出で揃ひたる有様は如何に面白き事ならんと都の外知らぬ心には今更御地が戀しく相成申し候(相成申候)。

來月六日は靖國神社の大祭にて前後三日間相撲競馬花火等これあり(有之)例年の通り賑ひ候ふ事と存じ候ふ間(賑候事と存候間)御令弟様御同道御宿り掛けにて御來車下されたく(被下度)御待ち申し上げ候(御待申上候)。頓首

珈琲入角砂糖失禮ながら(乍失禮)幸便にてさし上げ申し候(差上申候)。御笑留(御笑留)下されたく(被下度)候。

今日の書簡文には口語體と候文體との二つあれど古來の習慣上候文體の方が猶ひろく用ゐらるるなれば之に習熟すべきこと大切なり。されど

御心に掛けさせられ。御壯健に入居の意らせられ。を

御心に被爲掛。御壯健に被爲入。

有り難く存じ奉り候。下されたく。失禮ながら。之有

り。を

難有奉存候。被下度。乍失禮。有之。

の如く讀み下しにても漢文の如く反り字に書きてもいづれにても可なり。又

相成り申し候。賑ひ候ふ事と存じ候ふ間。差上げ申し候。を

相成申候。賑候事と存候間。差上申候。

の如く、動詞の語尾を省きてても亦書きてても可なり。(但し、詞の切れたる所の候は、読み誤る憂なき故に、候ふとせずして唯「候」と書く方體裁よろし)。

被下度候 を 被下度く候。難有存候 を 難有く存候。など書くは甚だよろしからず。

練習

左の読み下しの文中、反り字を交ふべき所は、反り字に改めて見たまへ。

【初幟を祝ふ】

尊書拜讀、今夕は御賢息御初幟の御祝(ひ)として、御招(き)に預り、御懇情の程萬謝し奉り候。仰(せ)に従ひ、參上拜賀致すべく候(ふ)處、生憎本日は友人中洋行のもの之あり、横濱まで見送り候(ふ)約束に付(き)遺憾ながら失禮致すべく、此段よろしく御承引下されたく願ひ上げたてまつり候。此人形は、小楠公の肖像に候へば、其忠勇に愛で御祝(ひ)申し上げ候。敬具

(よろしく、  
宜敷、宣布)

課題 【春季休業中旅行に誘ふ】

候文體に改めて見たまへ。

樂しかつた春季休業も残り三日となりました。この惜しい

(残念なこととして)  
本意なき次第  
無本意次第

(だしぬけながら)  
唐突ながら  
乍唐突

脚絆、草鞋などと  
とのへ  
(早朝)  
未明のころ。  
拂曉

三日をむだに送るのは、残念なことでありますから、急に思ひ立つて、明日明後日の二日間、某地より某地までの海岸と、某地より某地までの山間にかけて徒歩旅行を試みる積りで、既に右の地理に委しき平田君の賛成を得ました。就いては君の御賛成をも願ひたいが、いかゞですか、だしぬけながら御勧誘いたします。

課題 【右の返事】

同上

徒歩旅行の御企ては、僕も大賛成であります。準備をととのへて、明日早朝貴宅まで伺ふことにいたしませう。とり急ぎ御返事を申し上げます。

【夏の庭】

作例

いつしか、わが庭に夏は来りぬ。躑躅つづく、小手毬こて盛りやう／＼過ぎて、櫻の實は乳兒の指ほどに、こぼれそめたり。物置の長椅子とりいだして、若葉の下風に吹かるれば、子どもは袂たもとを襷たすきにかけ、金魚の池はるとして、庭の片すみかたすみに集る。(大和田建樹)

課題 【雨中の庭】 文體隨意

考

照り續きたる炎天。○人も苦み。草木も萎れる。○大粒の雨。○次第に急激に降り出す。○築山からは、俄に瀑が落ち

出す。○庭は海のやうになつて、梅の子も落ちて流れてゐる。  
 ○小供は玩具の船を持ちだして浮べる。○話聲も聞えぬ位。  
 ○雨蛙の囂しき聲が梢にきこえる。○遠雷の音に驚いて、小  
 供等は家の内にはいる。○金魚の池は濁つて、覆盆子は土ま  
 みれとなる。

【朝顔】

作例

かはゆきは、庭の我等が朝顔なり。きのふの暮に數へしは、一  
 つもたがはず咲きいでぬ。瑠璃のいろ三つ。小豆色五つ。え  
 び茶のやうなるが四つ。紫天鷲絨のやうなるが九つ。その外  
 なほ多し。いづれを美しからずと眺め捨てむや。葉かげに潜

めるは少しく恥しげなり。寝姿も見せず行儀よく打ちゑめる  
 は、我等の手本にもすべし。鉢なるは、蔓短くして花も少なけれ  
 ど、思ひしよりは、大輪なり。棚に纏はれるは、長うして數も多し。  
 我等があらき手に育ちながら、よくもうるは、しく咲き出でしか  
 な。筆の穂に繪の具少しく著けしやうなるは、明日の朝をよろ  
 こばしめむこと今より見えたり。うれしや又早く起きて見む。  
 釣瓶は取らねど、唐桃に手伸したる心ありげなり。如何にすら  
 む、このすゑを見ばや。(徳富蘆花)

課題 【朝顔の鉢を買ふ】 文體隨意

作例

縁日の店を素見しながら買ったのか。植木屋に行つて買つ



て来たのか。或は花賣りの来た時買ったのか。いづれにてもよろし。○三鉢か四鉢か○苔みの花であつたか、或は皆咲いてゐたか。○色は赤か白か紫か○大輪か小輪か。○朝露にぬれし時の姿。○夕日に萎れし時の有様。○朝顔に釣瓶とられてもらひ水。(千代)

課題 【物を貰ひたる禮狀】 候文體に作  
りなさい。

参考

旅行中の土産でも、手製のお鮓でも、お團子でも。

課題 【我家】 文語體に作  
りなさい。

参考

郷國の地名。○家族の人数。○兄は學士であるか、姉は女學校にあるか、弟妹は小學校の何年であるか。○父はどこかに勤めてゐるか、或は何かの商業をしてゐるか、又は農家であるか。○婢僕が幾人ゐるか。牛馬鶏犬も飼養してゐるか。○代々住んでゐる土地の舊家であるか、或は新に他國から移り住んでゐるかなど。○家庭に於ける日々の状態。

課題 【時の價值】 文語體に作  
りなさい。

参考

古より、軍將にても學者にても、苟も豪傑と呼ばれし者に時を惜まぬ者はない。鐵を打つには熱した時でなければ、器械を作ることは出来ぬ。枯草を乾すには、太陽の輝く時でなければ

ばかわかぬ。それと同様に一たび時機を失つたなら、再びく  
ることは六つかしい。人はよく機会を逸せないものが傑士  
となるのである。

一日ワシントンの書記が遅刻した。書記が辯疏していふに  
「私の時計が遅れたからである」と。ワシントンが直ちにいふ  
には「汝は確實な時計を買ふがよい。さやうにしなれば、余  
は他の書記を雇ふことにする」と告げた。

「一夕ナポレオンが晚餐に諸將を招いた。定刻になつて。諸  
將がやはり來なかつたから、ナポレオンは一人で食事を始め  
て、今や食卓を離れやうとする頃に、漸く諸將が來たのを見て、  
「諸君、食事の時間はもはや終つた。どうぞそれ／＼受持の職  
務をすることにしよう」と言つたといふことだ。

時間を大切に守るといふことは、義務を重んじ責任を盡す所  
以で、即ち立身の基となるものだ。(立身策による)

【綠陰幽草】

例

新緑満天、復滿地。恰も宇宙の水彩畫を観るが如し。仔細に  
點檢すれば、濃翠あり、淡綠あり、茶褐色あり、微卵色あり。その色  
彩の配合、言ふべからざる妙趣あるを見る。「綠陰幽草勝花時」も  
の、必ずしも詩人の負け惜みといふべからず。

新緑を以て黄葉に對す。一は大いなる未來を豫測し、他は大  
いなる過去を先知す。一は生意の勃々たるを見、他は老熟の落  
々たるを示す。與に反映の妙觀たり。(徳宮猪一郎)

課題 【暑中の快樂】 文語體に作  
りなさい。

参考

曉天にあり。○河漢淡し。○星斗いまだ消えず。○殘月微  
 茫。○風は池上の荷葉を揺かす。○蓮花のひらく音。○午  
 睡も快樂。○窓外風死し、草臥す。○梧桐數株孟宗竹六七竿。  
 ○籐の床一個。○書を手にして横臥す。○夢は既に華胥に  
 入る。○晚最も快し。○大月盆の如し。○松影地にあり。  
 ○涼臺の上。○樓上の欄に倚る。○月光室に満つ。○老幼  
 相對して語る。○清興盡きず。

課題 【修業法】

の文を、平明なる口語體に改めたまへ。

元來人の精力は限りあるものなれば、非常に勉強するは、却つ  
 て非常の怠を生ずる本ともなるべし。非常の勉強を要せず、  
 眠食常を失ふことなく、職ある者は職に従ひ、産業ある者は産  
 業を治め、さて後、暫時にても暇ある時、心を專一にして修業す  
 べし。朝に温めて夕に冷すことなかれ。昨は勤めて今は怠  
 ることなかれ。かくの如くにして日々に変ずることなく、月  
 を累ね年を積みてやまざらんには、餘業に學ぶ者といへども、  
 成學の效驗必ず見るべきなり。(松木直秀)

課題 【廣瀨中佐の最後】 文語體

参考

眠食常を失はず。  
 (眠ルベキ時ハア  
 タリマヘニ眠リ、  
 食フベキトキハ、  
 アタリマヘニ食フ  
 コト)  
 心を專一にす(一  
 心ニナル)  
 朝に温め云々(ハツ  
 ツカヌコト。朝ハ  
 ヤツタガ、夕方ニ  
 ハモウヤラヌ)  
 餘業(職業ノヒマ  
 ノトキ)  
 成學の效驗(學問  
 成就ノキキメ)

河漢(アマノガハ)  
 星斗(ホシ)  
 荷葉(ハスノハ)  
 午睡(ヒルネ)  
 華胥(快キ睡眠チ  
 云フ。黄帝夢ニ  
 華胥ノ國ニ遊ビタ  
 ル故事ヨリ出ヅ)

明治三十七年二月征露の役與る。○淺間艦長八代六郎海軍中佐有馬良橋氏等と、旅順港閉塞の議を建つ。○二月廿四日午前二時、死士七十七人と五船に分乘して第一回の閉塞を行ふ。○敵之を覺り探海燈を照し、海陸併せて砲撃す。○五船自ら船を爆沈す。○廣瀬中佐の船は報國號。○一人を失はずして還る。○三月二十七日午前三時第二回の閉塞を行ふ。○このたびは四船と死士六十五人。○廣瀬中佐は福井號に坐乗す。○兵曹長杉孫七船底にて爆沈の務に服す。○敵水雷を放つ。○福井號破れ、中佐脱出す。○一片の肉を遺せるのみ。

【水泳に誘ふ】

作例

將來平和の戰場に立たんとする生等海國男子の、身體を鍛ふべき好季節は來り候。就いては明日より某水泳場に赴かんと思ひ立ち候。兄と俱にせば興更に深かるべしと存じ、御誘ひ申上候。汗の中に送らんよりは遙に可勝候へば、御賛成願上候。

課題 【右の返事】候文體に作  
りたまへ。

参考

終日の苦熱に悶えてゐる折柄。○固より望む處。○直ちに駈けつけたくは。○如何せん先日來脚氣に罹り。○醫者通ひ。○當分はこの快舉に與ること。○病氣故とは。○遺憾至極。○御憐察。

【秋になりぬ】

作例

山里やまさとのけしき秋になりぬ。玉蜀黍の廣がりたてる彼方かたには、  
鳴子なるこの繩も引きつゝけたり。藤豆ふぢまめの花しろく、芋いもの葉の露うつ  
くし。朝あさまだ早はやければ、風はそよともいはず。(大和田建樹)

【彼岸花】

作例

秋のはじめ向島を逍遙せしに、西洋人のあまたして、彼岸花ひがんばなを  
摘つみるたるにあひぬ。彼はかゝる花をや愛すらむ。わが國人、  
毒どくらしとていたく忌みきらふものを、かはるは東西の人情ぞか

し。此花は處によりて天蓋花てんがいばな・幽靈花ゆうれいばな・死人花しびとばななどいふ。(大和田建樹)

課題 【秋の山里】 文體隨意

参考

秋は山里が面白い。○裏うらの山には栗がわれて、こぼれ落ちて  
ゐる。○前の畠はたけのへりには、柿が赤くなつてゐる。○小山の  
麓ふもとには七草の花が綺麗きれいに咲いてゐる。○稻がうつむいて、黄  
金の波をうたしてゐる。○山には様々の樹が黄葉くわうえふして満山  
錦を織りだしたやうである。○秋祭りとて、諸所の鎮守ちんじゆには  
祭禮さいらいが行はれる。三里も四里も隔てた所から、親類客しんるゑきやくが、山を  
越えて泊りがけでくる。○松茸まつたけ取にさそはれる。○稻扱いなひの  
手傳へもする。○秋の山里はいろ／＼の趣味がある。○と

りあつめたる事は秋のみぞおほかる。(徒然草)

【秋の夕ぐれ】

作例

静かなる秋のそら、綿をちぎりしやうなる雲西に流れて、日やうやく傾く。鎮守の森ひときはあざやかにして、鴨脚の木金色にかゝやけり。鳥二羽三羽、又一羽とねぐらに急ぎ歸れど、農夫はなほ夕日あびつゝ、田に畑に働く。

見るまに日は西山にかくれんとして、最後の光をはなち、村も、森も、山も、川も、紫にほひて、農夫の鍬肩にあり。童牛を牽いて歸る。刈田に鳴さびしくたつ。やがて日全く没して、水色のそらに宵の明星ひとりきらめき、世

界は闇に包まれむとして、煙こゝかしこに細くのぼる。天地しづまりかへりて、家のうち楽しき笑あり。(徳富蘆花)

課題 【書籍の買入れをたのむ】

候文體に作  
りなさい。

参考

- 1、書名
- 2、冊數
- 3、著作者
- 4、發行所
- 5、價格
- 6、代金

課題 【暴風見舞】

左の候文を、口語體に改めなさい

昨夜來は、近年稀なる大嵐に御座候處、御損所等も無御座候や御伺申上候。私宅にては、樹木を折られ、瓦を飛ばされなど、大破損にて困入候間、御方角も如何かと御案じ申上候。右御見舞迄

如此候。不一

課題 【右の返事】

同上

昨夜來の大嵐に付、御早々と御見舞被下、難有御厚禮申上候。弊宅は風當格外に少なく、板塀を少々吹き傾け候位にて相濟候へども、御方角は風力ことの外強かりしと見え、種々の御損害御迷惑御察し申上候。實は小生よりこそ御見舞申上候はんと存居候處に、却て御使を戴き汗顔此事に御座候。必後刻參上萬縷可仕候。早々頓首

【松茸を贈る】

作例

拜啓 昨日は日曜にて天氣も無類に御座候ひし故、兄と昨遊びし山に、散歩がてら參り試み候ふ處、松の蔭より香ばしき風の颯と來ると思ふ間もなく、傘ひろげたる怪物の、かしこに二つ、こゝに一つと行みて待ち居り候ふを見つけ申候。やがて何れも捕虜に致し、兄の厨下に護送仕り候。去年は是なる木蔭にて、兄と共に煮もし焼きもしたると思へば御なつかしさ限なく候。御起居如何、御近狀御漏し下されたく候。追啓 松茸は汽車便にて差立候ふ間、到着候はゞ御一報を煩したく候。

【右の返事】

作例

御無沙汰申上候處、御壯榮の趣拜承奉欣賀候。御手に觸れたる某山の松茸はるく、汽車便にて御惠贈被下、今朝到着、何よりも難有拜受、昨秋の事どもそゝろに思ひ出でられ申候。見事ころびて兄に笑はれし急な坂は今も健在なりや。呵々、  
 尙々 御地諸君に宜しく御鳳聲を乞ふ (大和田建樹)

課題 【栗を贈る】 候文體

課題 【香魚を贈る】 口語文體

【英國ハイド公園】

作例

倫敦の公園中で、大きいのは動物園や帝室植物園のあるレゼント公園だが、名高いのはハイド公園です。此公園は市の西の方にあつて、隣にあるケンシントン庭園を合すと約八十萬坪あるさうです。ハイド公園は専ら散歩用に出來て居るので、木が繁り、花が咲き、草が緑だといふ外に、珍らしい慰物はありませぬ尤も、中に大きな池があつて、此池で船を浮べるも隨意です。倫敦のやうな賑な市の真中に、よくまわ此様な廣い散歩場があると思はばかり、市から此處に入ると、全然別天地です。ケンシントン庭園の方は、幾分か庭が作つてある。石の配置などにも注意してあつて、孰れかといふと東洋風に近い。唯、一言加はへて置くのは、倫敦に住む人が、此ハイド公園を唯一



の散歩場として、日曜とか、交際季節になると、美しく著飾つて、馬車又は馬に乗つて、吾もく〜と此公園に行く。見る物は何にもない、唯、散歩しに行くばかりです。(少年世界讀本)

課題 【上野公園】

口語文體

考

舊時は東叡山寛永寺と稱し、芝の増上寺と共に徳川氏の菩提所たるのみならず、代々輪王寺の宮は寛永寺に住まはれ、徳川氏が何かの時は、之の宮を奉じて京都に抵抗しようと思つた所であるから、樓閣寺院は、全山に充滿してゐたが、明治元年幕府が滅びて、江戸城は官軍の手に渡された時、幕府の旗本は彰義隊を組織して、輪王寺の宮様をつれて此所に據り、官兵と戦

ひ激戦して敗れ、宮様は會津へ落ちられ、堂塔伽藍は皆灰燼となつたが、帝都を東京に移さるゝになつて、公園となり、明治十年以後、四回内國勸業博覽會を此所に開かれ、境内に博物館、動物園、圖書館、美術協會、列品館、美術學校、音樂學校、東照宮、大佛、清水堂、不忍池等、新舊の建物があつて、老櫻山を埋め、松杉その間に雜り、塵埃起らず、實に幽邃の公園で、總面積十六萬九千百六坪ほどある。

【猫を畜ふ説】

作例

猫を飼ふもの多くは猫をやしなふことをしらず。飯をあたふるに鯉ぶしを入れ、肉味を加ふ。猫は常に厚味を食とする時

は鼠をいらず。猫は麥をたきて味噌汁をかけ與ふべし。その他の食をあたふべからず。常に肉食にならばすれば、肉なき時は必他の家にいたりて魚肉を盗む。人を養ふも亦復しかり。

(柳澤淇園)

課題 【獵犬を畜ふ説】

文語體に作  
りなさい

課題 【慈悲心】

左の文章の要點を失はぬやう、凡、半分位の文に短縮しなさい。

世の中にかへる、ででむし、はへ、いもむし、などいふ蟲あり。罪もなきものなるに、心なき人は見付次第にこれを苦しめ、これを殺すことあれども、以ての外の事なり。たとひ如何なる蟲

にても、無益にこれを痛むるは宜しからず。且又小さき活物をむとくするよりして、追々これに慣れ、我同類の人を扱ふにも、慈悲の心を失ひ、遂には大惡無道の働をなすに至るべし。故に人若し不圖したる出來心にて、かかる蟲を殺さむとすることあらば、則ち我身に立返り、若し我身體より數倍大いなる怪物ありて我を苦むること、今我々の蟲を扱ふが如くならば、その苦痛いかばかりならむと、身に引替へて蟲のいたさを思ひ知るべし。(福澤諭吉)

【秋の暮】

作例

岡に登りて見れば、草刈は花の草ども枯葉ごめにうち束ねて、

車に積み歸る。向ふの田には、掛けほしたる稻のひまより、今日刈りたるを取り入るるも見ゆ。空の色水よりも淡くなりて、遠山里の煙も物がなしきに、衣打つ槌の音物つく白のひゞきなど、ここかしこに聞えて旅ならぬ身も心細し。まして千里の外に親ある人如何ならむ。(大和田建樹)

課題 【修學旅行中の樂しかりし

事ども】 口語體

課題 【東京市の交通機關】 文語體

【出水見舞】

作例

今朝の新聞にて、御地出水の事始めて承知、御困難如何計かと

奉恐察候。床上にも上り候處少からず候由、御宅は如何、別に御田地等御損害は無御座候や、折角御氣遣申上候。右御見舞の印として、味噌漬二樽、汽車便にて本日差上候間、到着の上は御入手被下度、猶御模様御序に御聞かせ下され候様願上候。不備(大和田建樹)

課題 【火災見舞】

右の出水見舞の文を三讀して、さて後作りたまへ。

昨夜は御近火の趣○今曉御類焼との御事○折しも烈風○強風にて○御水利不便○いかばかりか御驚きの事と○御残念御察し申上候○少しも存じ申さず○今朝新聞にて○早速參上可致等の處○御見舞の印までに。

【入營を報ず】

作例

拜啓 出立の際は、態々御見送被下、殊に結構なる御餞別まで頂戴いたし、難有奉存候。本日無事入營、歩兵第何聯隊第何中隊に編入せられ候間、此段御知らせ申上候。兵營の状況は何れ後便に可申上候。右取敢ず御禮旁、御報知まで如此御座候。草々不一

課題 【入營を祝はれたる返事】

候文體に作  
りたまへ

御手紙忝く拜見○御健勝○御勉學の段○今般入營致候に付て御懇切なる御詞祝を賜はり○仰の通國民の最大義務○一

身を捧げて、國恩に報ずる覺悟○御心付の事は御示教に預りたく。

【冬の夕】

作例

月清し。出で、庭を漫歩すれば、絶えず散る栗の枯葉は、雨の如く顔を打ち、足を埋む。雪と散り、霧と碎けて、竹の葉風に玩ばる、光もおもしろきに、あはれ柴の戸おとづれん友もがな。二もと三もと切りのこされたる白菊は、なほ幸に垣のかけにあり。

(大和田建樹)

課題 【冬の夜】

文語體

冬夜の團居は面白い。○つい近所の従弟の家へ話しに行く。○炬燵の周囲は附近の友人等と合せて四五人でとりまかれる。○叔父さんの實戰談が出る。すると又従弟の祖父さんの西南戦争の從軍談の自慢話が始まる。○溢茶が出る。柿餅が出る。食べながら聞くと飽く時がない。○外にはバラ／＼と霰のふる音がする。○十一時になつた。○然様ならと門に出て見ればいつのまにか一寸ばかり雪がつんでゐる。まだ盛んにふつてゐる。○羽織を頭からかぶつて我家の門に駈けつけて下駄の雪をトン／＼と落しながら只今……。

## 【冬の日記】

## 作例

二月三日 日曜 昨夜おぼつかないと思つた空は、名残なく晴れ渡つた。朝飯そこ／＼、霜を踏んで叔父の許を訪ふと、例の獵犬ジョンが勢よく門外に駈け出した。つゞいて銃を肩に立ち出でた叔父が、早いな。一緒に行かないかといはれる。「そのなりでは、いけませんよ。今日はうちで御遊びなさい」と、門のうちではいれるのは叔母である。「それではこの次にお伴いたします」といふと、意氣地がないなとお笑ひなされて叔父は出て行かれた。

叔父の獲物を見たいものと、夕暮まで遊んでゐたが、なか／＼歸られない。明日の下調もあるからと、叔父のとめるのもきかずに歸宅した。

夜國語の下讀みをする。菅茶山先生の文章である。書札の文字にも死活があるとして、一筆啓上仕候より、御無事御堅固云々、私宅恙なく時候御自愛云々は、書くも書かざるも何程の事もなきなり。さるをこの間の寒氣は我が郷は海濱に氷を見、或は半月・一月の早なるに、餘所には夕立すれども、こゝには降らずなどいへば、同じ時候の挨拶にても、其の地の氣色のあらはれて、書狀の文字おのづから活くるなり。」といはれたのは、いかにも尤ものこと、思ふた。(實業新讀本)

課題 【冬の月曜と火曜との日記】

文語體に作  
りなさい

【正直は最良の方便】

作 例

世界の富豪ロスチャイルドが、成功の秘訣として、その家族及び店員に示せる格言およそ十一、而してその第一に掲示せるものは何人も熟知せるところにして、又何人も行ふに難んずるところなり。

第一格言とは何ぞや。いはく、正直は最良の方便なりと。

この語何人も皆これを知れり。彼豈その然るを知らざらんや。知つてしかもまづ示すにこの陳腐なる格言を以てす。知るべし、この格言がいかに必要にして、又いかに實踐に難きかを、知れるも行はざれば知らざるに同じ。後のこの格言を讀むもの、よくこの理を思はざるべからず。(實業之日本に據る)

ロスチャイルド  
(獨逸人)

陳腐(フルクダサ  
ツタモノ)

## 課題 【成功と失敗】

文語體

参考

成功には必ず失敗が伴ふものである。○幾多の失敗が経験となり、遂に成功の曙光を認むるやうになるのである。○最初からとん／＼拍子にうまい事ばかり続くものでない。○順潮ばかりに安心してゐると、一朝逆境に陥いつた時に、忽ち敗亡する。○苦い経験は何等の事業にも必要である。○そこで勇氣が何人にも第一番の大切である。○百敗撓まずとか、艱難汝を玉にすとかいふ語があるのも、勇氣のある人についてのことである。○ぢきに自棄を起す様な人は、最も不勇無氣力の親玉で、到底成功すべき人でない。

## 【市民と兵士】

作例

庶民は平服を著けたる兵士なり。兵士は軍服を著けたる庶民なり。一旦緩急あれば、其の身軀を抛ちて、國家の光譽と威信とを恢宏擴充するは、素より兵士の義務なり。而して亦庶民の義務なり。現役豫備後備より國民軍に至る、其の國民護國の大精神に基くもの、則ち一なり。それたゞ一なり。彼等が身を挺して國家に酬いむとする亦うべならずや。

全國民を舉げて兵士とし、全國を舉げて城となし、八洲の水を舉げて池となす。是れ我全國民の決心なり。既にこの決心あり、天下誰か我を禦がむ。(徳富猪一郎)

課題 【日露の役に我軍の勝ちし】

最大理由 【文體隨意】

課題 【敬字先生】

左の文を口語體に改めたまへ。

東京に二學者あり。曰く三田の福澤氏、曰く小石川の中村氏、小石川の中村氏とは、同人社を建て西國立志篇を譯して有名な敬字先生これなり。東京の兩端より、西洋主義を以て、紀律なき當時の紛雜社會を挾撃せしが、福澤氏は其の執る所平民的なりしを以て、廣く社會に影響を與へしは、遂に中村氏に勝りしならむ。然れども、中村氏も亦大に西洋主義を輸入して、西洋道德、

主義を加味したる結果は明に顯れたり。氏は漢學の力深かりしがため、其の西國立志篇の如き、西洋品行論の如き、實に英書翻譯の事業未だ盛んならざりし時にあたつて、世人に利益を與へたる最も完全のものといふべし。(明治文學史)

【謙信給鹽】

作例

武田信玄、國不濱海、仰鹽於東海。今川氏真與北條氏康謀、陰閉其鹽。甲斐大困、上杉謙信聞之、寄書信玄曰、聞氏康氏真困、君以鹽不勇不義、我與公爭在弓箭、不在米鹽、請自今以往、取鹽於我國、多寡唯命、乃命賈人平價給之。(日本外史)

右の漢文を、試みに國文に譯して見ませう。



武田信玄の領國は、四方山のみなれば、日頃鹽をば東海の國々より買ひ入れたりき。今川氏眞、北條氏康と謀りて其の鹽を賣らぬやうにしければ、甲斐の困み云はむかたなかりき。上杉謙信このことを聞きて、使を信玄の許にやりていふやう、氏康、氏眞等、鹽を以て君を困むるよし、實に勇もなく義もなき行ひなり。我年來君と戦ふといへども、そは弓箭の争ひにして、米鹽などにて勝敗を決せむとはあらず。願くば、今後は我國より買ひ給へ、多くとも寡くとも、そは貴意のまゝなるべしとて、商人に命じて價格を定めて賣らしめきとぞ。

課題 【慈悲濟人】

左の漢文を、國文に譯したまへ。

伊達政宗、幼名梵天、生甫五歲、嘗出遊佛寺、見不動像、指問近臣曰、此何者、何其顔貌之猛也、對曰、不動明王、其貌雖猛、其心慈悲濟衆、梵天曰、武將亦宜如此。 (中村和)

課題 【油斷大敵】

左の漢文を、口語體に譯しなさい。

永井肥後守、爲執政、就井伊掃部頭、請教、井伊曰、明日當盛服來、永井如其言、井伊出見曰、諺曰、覆爲大敵、子知之乎、苟曉此理、可以無過。 (原忠成)

【憎き物】

作例

暫しこそあれ(暫  
シコソヨクアレ)  
ノ意(ノ意)  
ツイとわびし(ゴク  
ツイ)

朝起きて物書かひとするに、硯氷りて筆動かず。湯をさして墨をすれば、暫しこそあれ、又かたへより氷りゆきて、ほろくと筆の穂先にかたまりつく。いとわびし。食ふ物にたかる蠅、眠たき耳おそふ蚊、憎きものはあまたあれど、これ程には思はず。(大和田建樹)

課題 【卑しきもの】

卑は、尊の反対で、尊敬すべからざるもの、稱である。賤は貴の反対で、物價安きより轉じて、下等なるにいふ文字である。貴賤は身分等級の上の區別であるが、尊卑は人格のうへより區別する文字である。即ち爵位や官祿が高くても、徳行がな

ければ卑といふべきである。この題では、精神や行爲のうへについて、卑しいことだと感じたことを書いてみたまへ。

【歸る子供】

作例

寒雲地に低れて、落ちくる物を見れば霰なり。三人四人と手を引き連れつゝ、學校の子供は歸り來る。彼の心は春なるべし。彼の望は蒼なるべし。北風肌を裂かば裂け。かしこには見送る良教師あり。此方には待ち迎ふる慈父母あり。(大和田建樹)

課題 【遊べる子供】

前の「歸る子供」に倣ひて、無邪氣に遊んでゐる子供のことを書いて見たまへ。

課題 【郷里の小學校に物品を寄贈す】

候文體でも、口語體でも隨意

自分の卒業した小學校に寄贈するのである。歴史上の参考となるべき書籍でも地圖でも、繪畫でも、或は博物の参考となるべきものでもよろしい。旅行した土地の珍品、寺社の圖や縁起でもよい。自分の多年通うた學校には、まだ知合の懐しい兒童も、慕はしい先生もあるだらうから、些細な物でも喜んで見てくれるにちがひない。その親切を喜ぶにちがひない。

課題 【野菜をおくる】

左の文を候文體に改めなさい。

寒さに向ふ時節となりましたが、益御多祥で、御いはひ申しませう。今年には田舎に引つこみました結果として、野菜を作りま

す事が、段々上達いたしましたから、おほめに預りませうがために、蕪を少々さしあげます。十分ほめて味はつて下されまするやうお願いします。

課題 右の返事】

左の語を用ゐて、候文體に作りたまへ。

思ひもかけず。○△△△の蕪○態々御使を以て○難有○さすが御自慢○如何にも御出来ばえ○御手際○感服○尙拜味○審査○妄評いたしませう。

課題 【同窓會不參の通知】

候文體

必ず參會の心組でありました。○樂ふにして居りました處。○今朝俄に親類に取込事が出来まして。○止みがたき事故が。○據なき要件○昨夜より發熱○頭痛腹痛下痢症○隣家に不幸有之○或は遅刻若は不參するかもしれない。○其節はよい様に御取計○來會諸君に宜しく○萬事宜しく御依頼○用事が早く済みましたなら遅くとも。

### 【旅行と植物】

作例

今もし汽車に乗りて長程の旅行をなさむか、いたるところ、山送り、水迎へ、原野ゆき、森林きたりて、その景色の異なるものあるを覚えむ。こは山容水態、自然の地形に本づくは固よりなれど、

又そこに生ふる草木が、さまざまの趣を添ふるにもよるなり。試みに、東京より直江津行の汽車に乗りて、武藏上野の平野をすぎ、高崎にいたりて左に折れ、妙義の山の麓にそひ、横川の驛に達せむか、この間のながめ、東京附近と比して甚しく目をひくものもなからむ。されど、その驛より碓氷嶺を登り、輕井澤にいたりむか、氣候の俄に變ると共に、野生植物のありさまも、また大にその趣を異にせむ。殊に盛夏の候、野に原に百花の咲きみだるるなど、東京附近の春の景色に似たるを見るべし。

さて、これより更に道を轉じて、下野なる日光山に遊び見よ。東照宮の廟のあたりは老杉枝を交へて、晝なほ暗きをおぼえむ。大谷川を溯りて中禪寺に達せむか、湖畔一帶の山腹には落葉木多く、その若葉の時のときは、緑滴るともいふべからむ。また

男體山に登らむか、白根山の麓にいたらむか、樅、落葉松等の針葉樹の密林、蒼鬱として、遠き所よりもなほそれをみとめ得べきなり。また赤沼が原などには、水蘚の生ひしげれるのみならず、高原因有の草花おほく、夏時にいたりて一時に花ひらくなど、原頭恰も一大花苑のあらはれたるが如きおもひあらむ。(三好學)

課題 【修學旅行第一日の見聞】 (文語體)

【水村】

作例

村あり、家五軒。川あり、舟一隻。橋あり、柳三株。こはこれ、北條より、那古へ通ふ路にて見たるところ、水村の趣よくそなはれ

り。たゞ余に歌のなかりしをいかゞはせむ。(落合直文)

【春の水】

作例

山吹こぼれて、春の水淺黄に流れたり。その下を漕ぎのぼし漕ぎくだす小舟二三艘。十四五の男兒は、はだぎ一つになりて棹を取り、櫓をあやつる。日は長し。子等の行く末は遠し。見る我さへに心おのづから若やくよ。(大和田建樹)

課題 【初春の山里】 (文語體)

考

谷間にある、不等邊の三角形や四角形の瘠田には、まだ薄氷が

張りつめてゐる。○山蔭の崖下を流れてゐる小川には、小さな水車小屋が設けてあつて、ゆるく廻りながら、折々コトンといふ音のする響も、さむそうに聞える。○川柳が柔かな筆の尖のやうな芽を出してゐる。○どこも春のやうな氣はしないが、百姓屋の日當りのよい馬小屋から、黒馬が頭を出して、大きな聲でヒン〜と嘶いてゐると、藪かげから鶯のさゝ啼がもれてくるのは、都で見られぬ初春の景色である。

### 課題 【雨】

左の文を、文語體に改作したまへ。

春は、雨のふるのが、靜にのんきな氣がするものである。軒端のあたりから、霞んだやうで、ごく細い雨なので、衣服はぬれは

するが、殆んど降るとは見えない。軒を落つる水も、時々音がして、蜘蛛の古巣には、玉を貫いたやうに雨水が宿り、庭の芝生の底には、青みが少し添つてきたのと、絲のやうな柳の枝が動きもしないで、露がとまつてゐると、どちらも甚だゆつくりとした氣持がする。燈火も何となく光が濕つたやうに見える、鐘の音がかすかに響くのも、心中が澄み渡るものである。夜が更けて、梅の暗香が匂つてきて、花にはつらいと心得た雨だが、却つて風情がある。

### 【公共事業】

作 例

人は職業を勉むる外に、社會の公共事業に參與すべき務あり。

公共事業とは、學術技藝の進歩、風俗の改善、變災の防遏、公衆の衛生、各種の慈善事業等、一般公益のために盡す事業をいふ。これらの事業は、自己の利益のためにあらずして、全く公益を計るにあれば、頗る高尚なる事業なりとす。

課題 【公衆衛生】 (文語體)

參考

公衆衛生は、防疫、上下水の設備、飲食物の取締、市街の清潔、船舶鐵道の衛生、學校衛生、工業衛生、獸畜衛生等である。○防疫は傳染病の豫防及び消毒で、共に法律で規定してある。○若しも罹つた者がある時は、直様その戸主や醫師は其筋に届出をしなければならぬ。○一人の病人を嚴重に消毒しなければ、

幾千萬の人を殺す虞がある。○世間にはまだ之を陰蔽さうとする者がある。○人たる徳義を知らないものである。

○若し一軒の家に火を出して、家の人で揉消さうと思つて、警報もせず、愈大火事となつて、他人の財産を焼いてしまひ、或は人を死なせるやうな者があつたらどうだ。傳染病を陰蔽する罪は之よりも大きなものである。○豫防と消毒の方法は、規定通り、官吏や醫師の命に従つて、すこしでも背いてはならぬ。

【按摩】

作例一、

ある一人の按摩が、最早仕事を了つて、杖をつき、裏長屋の

自分の宅へ歸らうと、但ある路次口まで来たが、丁度其處に一匹の犬が睡て居たのを知らず、杖で突いたから堪らない、犬はキャ／＼と叫んで逃げて往つた。按摩も、是は可哀相な事をしたと思ひながら、二三間歩いて往くと、此處でも亦犬を突いた。そこで按摩は驚いて、この犬の脊は何といふ長いのだらう。(新選笑話集)

## 作例二、

ある處に一人の按摩ありき。既にその日の活業もをはりければ、杖をしるべに、裏長屋なるおのが家に歸らむとて、ある小路の入口まで来りしが、折ふしそこに一匹の犬の睡れるを知らず、ふと杖にて突きければ、犬は痛みに堪へず、鳴き叫びて走り去りぬ。こは罪ふかきわざをもしけるかなと思ひつゝ、二三間ばかり

り往くほどに、再び同じやうなる犬を突きけり。按摩はいたく驚きて、この犬の脊は、などかくは長かるらむとつぶやきぬとぞ。

## 課題 【値踏み】

前文の例に倣ひて、左の口語體の文を、文語體に改作したまへ。

或所に、好んで物の値踏をする人がありました。何でも品物を見さへすれば、これは何程の値打がある。それは何程するなどと、すぐに値段をつける癖があつた。一日別懇にする友人が来て、君は物を見ると、何でも其値段を附けるが、あれはよくないことだ、商賣人なら兎も角も、苟も君等がそんな事を言つては、品位に關係するから、今後其癖をやめた方がよいと忠告した。すると、其人は、大に其忠告を喜んで、いや誠に有難う。



君の今の一言は、僕のためには、實に千金の價がある。(新選笑話集)

課題 【曉起の記】 文體隨意

参考

中々實行が困難である○夜更しがわるい○自分が實行したのは、春であつたか、夏であつたか、その時季○春なら霞こめたる四方の山々の曉天の景色がどうであつたか。櫻花の眠よりさめた姿がどうであつたか。○夏なら早朝の涼風に草葉の上の白露がきらめいてゐて、心地がよかつたなどの景色○冷水で顔を洗つて、郊外に散歩した心地○書齋を掃除して、窓の下で讀書した工合など○この實驗によつて、今後はどうする積りであるかなど。

課題 【洋行問合せ】 候文體

参考

友人などの洋行する由を聞いて、その出發の時日を問合せるのである。○新聞にて承知しますれば。○商況御視察のため○歐米御漫遊○獨逸へ御留學○健美に堪へませぬ○御素志を御遂げなされること○早速拜趨御準備の御手傳○風邪に侵され○氣分勝れず○明日は必ず相伺○御發途は何日○御乗船は何丸○御乗込は何船ですか○御多忙中恐れながら。

課題 【右の返事】 候文體

出立日取等御尋下され○實は疾くにも御知らせいたす筈○

俄の事で○多忙○心ならずも今日まで遷延○却つて御書面をいたゞき○來週火曜日○新橋何時の汽車で横濱に参り○何々丸に○何れ御違乞に○委細はその節○御風邪いかゞ○御注意○本年は別して餘寒が。

課題 【註文を受けし返事】 候文體

参考

昨日は郵便で○何々の品御註文仰せ下され○毎々御用のほど○御註文の品當節全く品切○同業各店それ〴〵聞合せましたが○由て此品は何々の模様は聊か異なつてはをります  
 が○地色地合とも同様の品○これで御間に合ひますかと思つて○直代その外委細の事は、手代の者口上で○聞合せのた

め彼是手間どりました○今日までかゝりまして。

【人の寶】

作例

金玉貴しと雖、人の寶は廉潔に勝れるはなし。支那春秋の時に、宋の國に司城子罕といふ人ありき。或人より美しき玉を贈りしを受けざりしかば、かの人、この玉は、玉工に見せしに、よき寶なりと言ひしが故に贈りたるなりといふ。子罕答へて、我は貪らざるを以て寶とし、汝は玉を以て寶とす。汝、今、汝の寶を我に贈り、我亦わが寶をすてて、汝の玉を受くる時は、彼此互に寶を失ふなり。しかせむよりは、與へず取らずして、各々その寶を有する方勝るべしといひきとぞ。子罕の玉を受けざるは、その最も勝

れたる寶を有せむが爲なり。(那利通高)

### 課題 【廉潔】

文語體

参考

廉潔は、貪慾の反對である。○清廉潔白な者は、金銭利慾のためには節操を汚し、主義を曲げるといふことをせぬのである。○廉潔といふ行は私交上に現はるゝのみでない。會社に於ても、政府に於ても、やがてその職務の上に現はるゝものである。○貪慾な者は私利を謀るに於て、廉潔な人は公益を謀るに於て、自然の勢である。○世が追々と進歩してきて、生存競争が激しくなるにつれて、正直を以て愚となし、廉潔を以て狂と思ふやうな傾向が見えるが、實に歎すべき次第である。

ある。その公人たると私人たるとを問はず、廉潔の精神を以て立たなければ、真正の國民福は得られぬのである。○近く故人となられた乃木大將の如き人は、實に廉潔の神様である。現代にもまだ彼様な人があるだらうから、頼もしいことである。

中等作文實修書 第三編

【小金井に花を観る】

作例

夢さめて聞けば、軒の玉水音たまづみすなり。「あすは小金井の花にと思ひしを、頼みがたきは空の晴雨かな、さらば」とて、ふたたび枕とりたるほどに、「雨止みぬ」とて、母は辨ぶん當たうととのへなどしたまふ。「あなうれし、いざ」とて出で立ち、新宿より汽車に乗る。

雲やうやく破れて、日かげは菜の花にさしそめたり。國分寺より下りて、麥青き田舎道を行くに、塵ちりなく風もなければ、まことに心地よし。堀づたひに一里程もあらむか、一すぢの流を中に

音すなり。  
音するなり。(誤)

望(眺望)

臨(淵に臨む)

起

(オチアガル。オキアガル)

(盛大トナル。衰ヘタモノガ盛ンニナル)

(111)の短句)

おきて櫻樹の立ちつゝくさま、空も一つに見ゆ。かへり見れば、花、我をとどむるが如く、さきを望めば我を招くに似たりほろほろとこぼれては水に漂よふ花もあり。道に散りしく花びらは、にほひある雪をふみ行く心地す。ほどよき木蔭にいこひつゝ、思へば人の世も何も忘れはてけるかな。天地ただ花の中にて、春風に酔はぬ人もなし。ここに流を通じ、ここに櫻を植ゑけむ昔の人を、地下より呼び起しても見せたきは、今日の春景色なり。村又村の花送り迎へて、歸の汽車は新宿に著きぬ。夕ぐれの空あたたかに霞みて、星も花かと思ゆる夜のさまなり。月も昇りぬ。家路も近し。ああ楽しかりし一日の遊びかな。(大和田建樹)

課題 【小金井の櫻】

左の文は、新聞記事であります。之を前の作例のやうに、上品な文語體に作りかへて見たまへ。

今が眞盛りである、境國府寺兩停車場には鐵道省の休憩所の外紅白の幔幕紅提灯で景氣を添へ、名物の櫻羊羹、櫻煎餅を山と積んで花簪の姉さんが客を引く、停車場は着車毎に乗降客が溢れる許り、客待の人力車も鼻息が荒い、花は境橋からが見頃で、美しく咲き亂れてゐる。堤の兩側を紅手拭や簪の揃ひが行く、二里の間の兩側は、殆ど掛茶屋と寫眞お土産の露店が並ぶ、一番賑ふのは小金井橋附近である。(萬朝報)

【雨後の春色】

作例

萬象(萬物といふに同じ)

滴々(シツクカガ、ポト／＼ト垂レル)

雨後、日光にかゝやく萬象の色あざやかなるを見よ。見渡すかぎり渺渺と海の如く茂りたる桑の若葉は、一葉一葉に露を帯び、雨に洗はれ、日光を吸ひ、日光を吐きて、金綠色の爛赫々と燃え、晃々と照り、その間には、大麥・小麥の波打つあり。遠き新樹の一村は、緑より緑をゑがきて青きそらにうつり、そのあひだに、低き山はうすく、黛をゑがき、高き峰は清く雪の肌をあらはし、涼しき風吹きくれば、若葉は、心地よげに身ふるひして、惜しげもなく、金剛石の滴々をこぼす。

先程まで、空のひとすみに固まり居たる雲の、いつしか融け、散り、流れて、今は風に梳かる、羊毛の如き雲、二すぢ三すぢ碧空に舞ひ、それすら且流れ且消えつゝ、あるを見よ。心地よき眺ならずや。(徳富蘆花)

課題 【初夏の雨後】

文語體

参考

ひと雨ふつたため、日ましに庭の景色がととのつてくる。○垣根には、朝顔・えぞ菊などの種をまいたから、今に蝶の羽を廣げたやうに芽をふくだらう。○芭蕉こすもすだりやなどの芽を出したのを、隣から貰つてきて、まはりに竹をたて、子供の踏まぬやうにしておく。○池を掘る○浅くては、鮒が金魚をとる恐があるので。○石をおいたり、小き堤をこしらへたりして、そこに躑躅の咲いたのを、植木鉢から移してうゑた。○紅の色が小池に映つて、波をそめてゐる。○金魚に目高などいれて泳がす。○讀書に疲れた時に、籐椅子を据ゑて、晝中の友とする。○雨にぬれた、さくらんぼうや、まだ青く愛らし

い梅子<sup>うめのみすり</sup>李<sup>り</sup>などの、青葉がくれに見えてるのも心地がよい。○  
縁側<sup>えんがわ</sup>に腰をかけて、こんな景色を觀てゐると、しばしは極樂<sup>ごくらく</sup>世  
界である。

課題 【遠洋漁業】

左の文を文語體に改作したまへ。

遠洋漁業とは、讀んで字の如く、遠洋の漁業に従事すること、  
漁獵の仕方は、沿海の漁業と同一であるが、何分遠くの海へ出か  
けての仕事であるから、船は大きくなければならぬ。それに海  
路の遠い所へ行くのであるから、日々の漁獵物を一々家に運ぶ  
譯に行かないため、それを船中に貯へて置く必要があるのか

何分

かたぐ

そして

そろく

くらべものに

たぐい船は大きくなければならぬ。そしてそれに伴うて、遠い  
海へ出かけて漁業をするに堪へるだけの準備はしななければな  
らぬ。

わが國でも、近頃は沿海の小漁業に満足しないで、そろく遠  
洋へ出かけて行くやうになつて來たが、しかしまだ歐米の遠洋  
漁業とはくらべものにならない。(岡村金太郎)

課題 【旅行の樂】

左の文を口語體に改作したまへ。

旅行して他郷に遊び、名勝の地、山水のうるはしき境に臨めば、  
鄙客<sup>ひやく</sup>を洗ひすすぎ、わが徳を進め、知を弘むるよすがともなるも  
のなり。

よすが(便利、タ  
ヨイ)

又見慣れぬ山川の有様を見て目をあそばしめ、其の里人にあひて、其の所の風土をとひ、或は奥まりたる山ふところに岩根踏みて尋ね入り、もとより山水の癖ありて、青山夢に入ること頻なる人は、心をとめて歸することも忘れぬべし。或は海邊山遠き眼界ひろき眺は、萬戸侯の富にも勝れり。又その里の名産に異なる味を試みるなど、そのたのしみいかにぞや。

すべて勝地に遊びて見聞することは、唯一時の耳目を悦ばしむるのみならず、幾年経てもその時の有様思ひ出でられて、樂きはまりなきものなり。(貝原益軒)

### 【獨立心】

作例

獨立とはすべて他人の厄介にならず、自分の力に衣食し、わが思ふ所を言ひ、わが思ふ所を行ひ、心に恥ぢず、他に屈せず、大事に臨んで節を枉げざるは勿論、一言一行等閑にせざるをいふ。一時の方便の爲に止むを得ずとて、右すべきを左し、東すべきを西するが如きは、獨立の精神に背きて、君子の愧づる所なり。かういへば、人間の行路は至極窮屈にして、とても打解けて人に交ることもなるまじきやうなれども、實際は決して然らず。抑、こゝにいふ獨立とは、外面に装ひて身の飾にもちゐるものにあらず。唯深く心の底に藏めて自守るまでの主義にして、その心の寛大なるは、大海の物を容るゝに異ならず。人に向つて多きを求めず。人は人なり。我は我なり。人の來りてわが獨立を妨ぐるにあらずば、悠悠として交ること甚だ易し。

萬戸侯(萬戸ノ土地ヲ支配スル君。大キナ大名)



獨立は生命より重し。これを妨ぐる者あらば、滿天下の人をも敵とすべし。親友の交をも絶つべし。骨肉の情をも去るべし。断じて躊躇すべからず。されど實際には決してかゝる劇しき場合はなきものなり。(福澤諭吉)

課題 【獨立心なき者の結果は如何】 文語體

### 候文の慣用語及び慣用字

候文には、古くより用ゐれる慣用語があります。今日では、強ち之れに據りて書く必要があるといふわけではありませんが、只今は新舊過渡時代の事でありますから、過半以上はこの慣用語を用ゐるのであります。それで自分が書く書かぬにかゝはらず、知つて置かないと不都合のことが出来ます。左に唯大

體のことを示しませう。

#### (一) 語頭に添詞を用ゐる

- 相(あひ) 相成 相覺 相願 相濟 相伺 相届 相心得
- 差(さし) 差許(さしゆるし) 差控(さしひかへ) 差繰(さしくり) 差出
- 差急 差支(さしつかへ) 差遣(さしつかはし)
- 罷(まかり) 罷在 罷越(まかりこし) 罷成(まかりなり) 罷出(まかりいで)

#### (二) 熟語

- 御勇健 御壯健 御安康 御安泰 御清福 御健康 御清榮(以上おまめでノ意)
- 御放念 御休神 御省慮 御安慮(以上皆御安心ノ意)
- 消光(日ヲクラス) 參堂(參上ノ意) 拜芝 拜眉(御目ニカゝル)
- 大賀 慶賀(以上およろこびノ意) 御海容 御宥恕 御寛恕(以上おゆるしノ意)
- 御笑納 御笑留(以上おしまい下されノ意) 御查收

御落筆(以上おうけとり下されノ意)

(三)假字にて書くべき處をも多くは漢字にて書く。

是丈(是だけ) 候得共(候へども) 明朝迄(明朝まで) 致度(致したく)  
御來車被下候哉(御來車下され候や) 宜敷願上候(宜しく願ひ上げ候)  
決而違背仕間敷(決して違背仕るまじく) 少々斗(少々ばかり) 月に  
十圓宛(月に十圓づ) 候共(候とも) 何卒(何とぞ) 逆も(とても) 乍  
憚(憚ながら) 筆墨杯(筆墨など) 兎角(とかく) 扱(又は措(さて) 嘸、嘸  
々(さぞ。さぞ) 吳々(くれん) 態々(わざ) 折角(せつかく) 目出度、芽出度(めでたく)

(四)敬語—遜語

自分の事を—私 拙者 小生 野生 迂生  
他人の事を—貴下 大兄 賢兄 學兄 老兄 尊畜  
自分の行くを—參堂 參邸 拜趨 罷出

他人の來るを—御來駕(こらいが) 御枉駕(こわうが) 後光來 御貢

臨(こふんりん) 御來車

自分の言ふを—拜啓 肅啓 謹啓 申上

他人の言ふを—仰 貴命 命 御來諭 貴諭

自分の手紙を—寸楮(すんちよ) 愚翰 愚札

他人の手紙を—尊翰 芳翰 貴翰 花翰 花墨 尊書 御書口

御紙面

他人の家を—貴宅 尊宅 貴邸 高堂 尊堂

自分の家を—弊屋 小屋 弊宅 弊家

自分の住地を—小村 弊村 弊郷 弊地 當地

他人の住地を—貴地 御地 貴國 貴村 錦地

存じ候—知つてなります 承り候—聞きました 致し候—します

仕り候—します 恐察—お察し 申し候(御届け申し候)—します

申し上げ候 御勤め申し上げ候—します 奉伺ひ奉り候—ます

候失禮致し候——ます  
出發仕り候——ます

(五)頼むことば

書簡文は、とり分け人の感情を動し易いものであるから、假にも不敬暴慢のことばを慎まねばならぬ。勿論の事は、何事にかかはらず、人に物を依頼する手紙は特に注意を拂はぬと、先方の感情をわるくして、出来ることも出来ないやうになることは、常にある事實である。

下され度候被下度候——を 下さるべく候可被下候

成され度候被成度候——を 成さるべく候可被成候

といふ時は、こちらから頼む言が、恰も命令でも下すやうに聞えて、先方に不快の念を起させるものである。成し下され度候被成下度候

といふ時は、被下度候、被成度候よりは、一層丁寧の言となりま

願ひ上げ候

といふよりは

願ひ上げ奉り候 奉願上候

の方が餘程丁寧になり、

懇願仕り候

有り難く存じ候 難有存候

といふよりは

懇願し奉り候 奉懇願候

有り難く感謝し奉り候 難有奉感謝候

の方が大に丁寧であります。自分の奉職口などを依頼する

手紙に

何卒御盡力成し下され度懇願し奉り候

といふべきを

何卒御盡力相成り度此段相願ひ候也

など書いてをる手紙を見た事がありますが、これでは、恰も盡力するのが當然であるといつたやうな文句であつて、人の感情を激せしめることが夥しいのです。手紙は口上の代りである、それにまだ口上の云ひやうも知らぬものは採用ができぬといつて、謝絶られた例は澤山あります。

(六)簡潔と趣味

書簡文は特に簡潔に書くのがよろしい。人事多忙な中に、管々しく長文句の手紙を認むるのは、自分も隙どるのみならず、第

一先方に對して失禮です。恰も人が用事を控へてゐる中に腰を据ゑて、長々と饒舌てゐるやうなものであります。今左に大和田建樹氏の書簡文作法、書簡組立法の中に云つてあるのを、参考のため御目にかけてませう。

暑氣甚敷候處

にて濟むべきを、

暑氣焼くが如く、其身宛然火爐の中に在る心地致候處

など長々と書き、

昨夜は御近火の由

にて濟むべきを、

昨夜は北風烈敷折柄の御近火にて、御宅の四五軒先まで焼廣がり候趣の處

など書く弊は除きたいものである。また一昨々日參上仕り候ふ積りにて、宅を出掛候處、俄に頭痛眩暈いたし、止むを得ず養生相加へ、一昨朝に至り全快仕り候。然るに同日は親類に不幸御座候由の知らせ御座候に付き、其方へ參り、昨日こそと存候處に、生憎田舎より來客を受け、今日は前述仕候親類の葬送にて斷り候事も出來難く云々

などいふは、事實にしても餘りにこしらへすぎたやうで、却つて先方の感じを害するだらうから、

一昨々日より參上の積りに御座候處、止むを得ざる條件打集ひ、それ故失禮に打過候義悪しからず思召し被下度、猶委細の御詫は明日參堂の上申し述べべく候。

など、しておくがよい。されど簡潔を貴べばとて

昨夜は御馳走難有存じ奉り候。拜借の御傘返上御落手被下度厚く御禮申上げ候

とのみでは、儀式通りの文言を並べたばかりで、色もなく情もなく、いはゞ他人の挨拶めいて、懇意入魂の間がらには面白くな

昨夜は御馳走、例の大頂戴の上に、太郎君の戦地談殊に大愉快にて、覺えず深更に至り恐縮千萬、歸りには御傘拜借萬々有り難く、おさんに持參致させ返上候間、御落手下され度、右御禮まで。早々

などしたなら、受取りたる人の嬉しさは一入であらう。故に古人の友人に寄せた書簡中には、親睦趣味の精神が溢れてゐる

のが多い。勿論これは親しき仲にやるものに限るので、事務的商業的の書簡には必要のないことである。

### 候文の認め方

手紙の文字の認め方に二様の法式があります。従來の慣用法には、假名文の中に反り字を交へて書いたので、國文の中に漢文があるといふやうな、奇妙な書き方でありますが、永い間用ゐ慣れた書きかたで、急に改めるわけには行かぬ。どちらの書きかたでもよろしいのです。だが反り字法の古い書き方も知つて置かないと、他人のを讀むことも出來ないやうでも、困るし、又たま／＼その真似をして書き損なつても、人に笑はれることに

なりますから、心得て置く必要があります。文法上からいへば無論よろしくないが、慣れて見ると、早くて簡單で、簡潔といふ點からいふと、よろしい處があります。今茲に少し古い慣用法をお目にかけてませう。

### 【梅見に人を誘ふ】

明治廿六年  
ごろの文

昨今は漸く暖氣相催し大に暮し能く相成り申し候。扱承り候へば、法華寺八幡社などの梅あちこちと開掛候ふ由、幸明日は日曜に付き、快晴に候はゞ、御同遊の思召は無御座候哉、歸路山田氏の別莊を訪ひ候ふも一興かと存じ候。右御一報奉煩候。不

括弧の中の文字は、原文にはなかりしなり。

【返事】 同上

尊書拜誦、梅見御企て之趣き敬承仕り候。折よく明日は何處へも約束無之如何暮し候半かと存じ居り候ふ處に御座候ふ間、必參會御愉快之御相伴を可仕と奉存候。小生より御宅を御誘引申し候ふ方順序に御座候ふ間、午前八時迄に罷出可申、先は貴酬如此に御座候。例の大瓢の御用意は御ぬかり有之間敷と存じ候へども、爲念御注意申し上げ置き候。呵々

右の如く動詞の語尾は皆省略するのであります。

【隱宅之花を贈る】 明治八年  
ごろの文

麗色搖蕩櫻花爛漫實に春光惱人之候に候。想ふに公園は遊履雜沓にて、老體は雖便車徜徉に不可ならむ。亦遺憾不尠候。

現下只草堂之遲櫻半開にて、濃艶頗可愛候間、風雨に不遇之際、一枝呈案下候。若佳作を賜候は幸甚。

【右答文】 同上

落紅既に委黃泥之際、郊外之遊行も、騷客紛紜の爲に却而殺風景に候。臺北之御隱宅者、避俗塵殆桃源之佳趣有之、殊に愛樹之嫩花一朵蒙恩賜奉感謝候。即瓶裏に貯へ、坐臥相樂可申候。且尊命に隨而、蕪詞一章供一粲候。伏而御添刪を是祈る。早々敬答

【寒氣見舞之文】 徳川時  
代の文

一筆啓上仕候。甚寒之節、御座候得共、益御勇健被成、御座奉、恐

慶候。右寒中奉伺御様體度、鶏卵一籠備尊覽候。御笑留之程奉仰候。恐惶謹言。

これは、殆、漢文でも讀むやうな氣がするのです。

今日では前例のうちでも、梅見に人を誘ふとある文くらゐの認めかたが普通であります。その邊は自分がよいやうに取捨すればよいのです。

被爲在(あらせられ) 被爲入(いらせられ) 不取敢(とりあへず) 幸不過之(幸これに過ぎず) 不相叶(あひかなはず) 不得已(やむを得ず) 乍御面倒(ごめんたうながら) 被成下(なしたされ) 無御遠慮(ごゑんりよなく) 蒙御厚情(ごこうじやうを蒙り) 不堪感謝候(かんしゃにたへず候) などは普通に書いてをりますすが、

未得拜眉(いまだ拜眉を得ず) 未仕到着(いまだ到着仕らず) などは、書き下しの方がよからうと思ひます。

・ 課題

【悔状】

左の参考を材料として、舊式の反り字や動詞の語尾を省いて書く法を用ゐて作つて見たまへ。

考

悔とは、不幸のあつた家に見舞を述べることです。御病氣とは少しも知らなかつたとか。知つてゐたら疾くに御見舞申す筈であつたとか、御生前に御尋ねしなかつたのは、遺憾至極であるとか、過日御見舞申した時は御輕快のやうに伺つたとか、御存生中は一方ならぬ御厚情を蒙つたとかいふ様なことを書くものです。○御報知○御訃報○思ひもよらぬ御通信○新聞で拜承○如何様の御病氣でしたか○御心盡のかひも



なく○藥石の御效もなく○御逝去○御遠逝○驚き入りまし  
 た○何と申上げやうもない○御愁傷○御落膽○恐察いたし  
 ます○別封聊かながら御香典として○粗菓一折○榭一對神  
 葬の時○造花一對佛葬の時○御靈前○御佛前○御神前

課題 【暑中見舞】

左の文は、徳川時代のです。それを現今の新舊混淆體に  
 改作して見たまへ。

一筆啓上仕候。嚴暑之節に御座候得共、其御許様、彌御勇健に  
 被成御座、珍重之御儀奉存候。將又如何敷御座候得共、吉野葛  
 粉一箱進獻之仕候。聊暑中御伺申上候印計に御座候。誠惶  
 頓首

混淆（入りマツル  
 コト）

課題

【盜難見舞】

從弟へ  
 候文體。新舊式いづれでもよろしい。

課題

【雨の日友の許に】

候文體

参考

春雨のじめ／＼降り暮す時は、實に寂しく退屈なものである。  
 曾て君の處で一見した八犬傳を讀んで見たいからとか、他の  
 雜誌でも、何でも借りにやるといふ様な手紙でも、又圍碁を一  
 合戦やるから遊びに來たまへというてやるのでもよい。○  
 外出も出來ず○語らふ友もなく○御閑暇なら○何か面白い  
 小説○拜借がしたい○閑談が試みたい。

【朋友】

作例

人は朋友なかるべからず。人にして朋友なくんば、廣き社會の中に孤立し、本國に在るも、猶、他國に在るが如く、大に落莫の感を生ずべし。

朋友は、我と、其の方向を同じくするものにして、大に我に力を添ふるものなり。われ一人にてはその力微弱なるも、朋友ありて我と結合するときは、その力忽ち倍蓰す。されば、朋友は、わが身外にある我なり。我も亦朋友の一部分なり。我と朋友とは、その體を異にするも、その心を一にせるものといふべし。朋友の大切なること斯くの如し。然れども、朋友は、最もよく之を擇ばざるべからず。若し然らずして、兇惡なる人と交るときは、腐

落莫(サビシキコト)

倍蓰(倍ハ二倍、蓰ハ五倍)

清溪(清ラカナルタニ) 澄波(水ノスミタル波)

背馳(ユキチガヒ、ソクコト) 締結(ヤクソク、チ、△スプロト)

敗せる空氣に入り、久しくして之に慣れ、身の臭氣を帯び害を受くるを知らざるが如く、漸次兇惡に化せらるゝものなり。故に朋友は、必ず善良なる人を擇ぶを要す。恰も清溪の石の澄波に觸れて益、潔白なるが如く、常に善良に感化せられんことを期せざるべからず。

朋友の間には、最も信義を失はざらんことを要す。信義なければ、互に相疑惑し、交情乃ち冷却す。それ信義は交友の連鎖なり。信義に由りて交を結ばんか、その身死すとも、友誼は爲に絶えざるなり。苟も信義を守らざらんか、友は盡く離散背馳して、復た締結すべからざるに至る。(勸語衍義の文を參酌す)

課題 【親友の必要】 文語體

朋友は澤山あるが親友は少い○嬉しきにつけ、悲しきにつけ、語りあうて慰むものは親友より外にない○親兄弟にでも語られぬ事も親友には打明けて相談ができる○親友は金銭財寶で得られない實際の寶である○親友のない人ほど寂しいものはあるまい○一人の親友は、多くの親類や百人の友を得たよりも勝つてゐる○親友はどうして得られるか○誠意を以て交る○相戒め相勵ます○艱難には相助け、歡樂には共によろこぶ○刎頸の交、斷金の友○休道他郷多苦心。同袍有友自相親。柴扉曉出霜如雪。君汲川流我拾薪。(廣瀬淡窓)

課題

【病後】

文語體

参考

決して不養生をすまい、飲食を慎むのは勿論、寒暑に堪へるやう、冷水浴なども勵行しやう、といふ風に病中の折、特に永煩ひをした時には、つくづくその苦しさを味はつた結果、誰でも彼様な考へを起すであらう。ところが病が快方に向つてくると、無暗に物がほしくなつてきて、醫師の注意をも用ゐないで、屢々失敗することがある。克己心といふことは實に難しいものではなにかと、我ながら恥かしい心地がする。櫻の花の盛り、人は上野飛鳥山とうかされる頃、垂れこめて春の行方もしらずに薬餌に親んで、熱度表の高低が不規則であることや、驗温器をおそる／＼、自分でひきだして見る折には、誠に心細いものであるが、熱も全く無くなり、身體も稍や力づいて、垢づいた

克己心(オノレノ  
慾ニカツコト)

まゝ衣服を重ねて、そろ／＼と家の附近に出て、菜種の花や蓮華草の咲いてゐる田圃のほとりを歩くのは、二三十年も旅にゐて、はじめて故郷に歸つたやうな懐しいこゝちがする。ひや／＼と病衣のすきに風をうけながら、右手の竹籤を見れば、筍も意外に高くのびてゐて、自分が病床にゐた時日の、長かつたことが追懐せられる。

課題 【冷水浴】

文語體

参考

世の中で、一番費用のかゝらぬ養生法は冷水浴である。○冷水浴は費用も熟練もいらぬ。○何の職業の人でも、どこの土地に住む人でも出来る。○一番簡便の法である。○その效驗は、皮膚

を強くし、寒冒を豫防し、血管の機能を活潑にし、食慾を進め、消化力を盛んにする。○神経系の官能を強くし、物事に取りづくに、氣が重くなく、はき／＼運んで行くやうになる。○精神が爽快になり、忍耐力や奮發力が旺盛になる。○冬の朝湯で顔を洗ひ、襟巻をして、炬燵にもぐつてゐる人と、氷を砕いて冷水をかぶり、風雪の中を歩いてもびくともしないのと、その元氣の差がどれほどであるか。○活動は寒氣を怖れるやうな人には出来ぬ。

【山の美】

作

唐人、巖を雲根といふ。趣あるかな言や。雲もと山より出づ。

唐の賈島の詩に  
「移石動雲根」

註に雲は石より生  
ずとあり

藕絲(蓮ノイト)  
羅裳(ウスイキモ)

澎湃(水ノ盛ンナ  
ルカタチ)

羅列(ツラナリナ  
ラフ)

しかも、山雲を得て益、その美を加へ、愈、その大を添ふ。試みに山前に立ちて、その山態雲容の極りなき變幻を見よ。先づ縷々として藕絲の如き雲の、徐ろに山の腹背に曳くを見ん。神女の羅裳を織るといふも、猶、その清艶の趣を盡すに足らず。忽にして雲の往來急に、澎湃として天を捲くを見む。山、その間に、或は湧き、或は没し、或は浮び、或は沈まん。かの洋々たる大海の上、點々たる鳥嶼の羅列せるも、猶この趣に比するに足らざるを覺えん。やがて空氣の運動靜穩に歸する、や雲は漸く下降して山腹に集まり、獨、山頂の悄然として半空に屹立するを觀ん。莊嚴の氣ここに至りて侵すべからず。

要するに、山は雲を得、雲は山に遭ひて、互に益、その美を増し、その奇を添へ、益、その大を發揮するなり。(志賀重昂)

課題 【富士山】 文語體

参考

古來、詩人畫家の材料に供せられたもので、富士山ほど多いものはあるまい。○山の容。○白雪を戴いた潔白な色。○世界に類がない。○古昔は、この山を見に諸方からくるものでも、多くは麓から眺め上げたもので、登山するものは稀であつたやうだ。○應仁の亂後登山者が大に増加し、天文、永祿の頃には、今川氏が登山者に關する法令まで出すやうになり、徳川時代になつてからは、更にその數が増加して、今では年々數萬の登山者がある。○老人も小兒も婦女子までも登山する。○嚴冬に登山するものもある。○彼の野中到氏が氣象學研究のために、夫妻絶

頂に越年したのは有名な話である。○登山するには五箇の道がある。一、大宮口とて駿河の富士郡大宮より登るもの。二、北口といつて甲州吉田より登るもの。三、東口といつて須走より登るもの。四、須山口と稱して駿東郡須山より登るもの。五、東表口といつて須走口及び須山口の間で、御殿場より直接に登るものである。○登山者は何れの道から登るにしても、先づ麓の旅店で、登山一切の用意をするがよい。旅店では萬端の用意を周旋する。

## 【全國大競漕會の記】

作例

待ち設けられし全國大競漕會の當日は來りぬ。曉起して湖

畔に向へば、星竹生島の上に涼しく光りて、湖面なほおぼろなり。ややありて、旭さし昇る頃となれば、數萬の觀客陸續として集り來る。番組は成りぬ。各校の選手は、紅・白・青・黄・紫・黒等に色分けせる帽子を頂きて、おの／＼その校旗のもとにつどふ。

午前八時、號砲轟然として響く。第一回競漕の組々、各、その艇に上る。紅・紫・青・白の艇旗は、相並んで朝風に翻り、八列の櫂は筏の如く水上に浮べり。

やがて、一發の銃聲と共に、櫂は水煙を揚げて一齊に水に入る。一上一下、調を亂さず、四艇悉く競ひ進む。既にして、紅旗、稍列を挺くと見る間に、青旗之を追うて列を挺く。忽ちにして、一艇追ひすがり、四隻瞬時に斜方形をなす。忽ちにして、左の方の一艇、舵手のかけこゑと共に矢の如く突進す。四艇は見る／＼變じ

競(ユス)プル、ユス  
 他動詞  
 拵(ユラ)ウゴ  
 動(静)ノ反對

て、矢の羽の形を爲しぬ。  
 陸上の群衆、汗を握り、息を呑んで観る。決勝點は三艇身のうち迫れり。紅旗と白旗とは、恰も相竝んで進めり、先後なし。既にして一艇身となる。白旗の艇電の如く漕ぎぬけ眞先に到着す。紅旗に先だつこと僅かに三尺餘なり。群衆の喝采天地を撼かす。

續いて、第二の競漕始まる。第三、第四、第五これに次ぐ。正午に暫し休憩し、午後第六競漕を始む。第六は、前五番に於ける優勝競の選手競漕にして、又最後の競漕なり。全國短艇會の伎倆の等級は、この一舉に決するなり。各艇の漕手等が意氣思ふべし。競漕の激烈なるべきは、豫め察せられたり。

午後一時、號砲、水上に轟けば、五艇、舳を揃へて突進す。暫くに

して、おのゝ前後を生じ、先んずるあり、後るゝあり。追ふあり、追はるゝあり。既にして、一艇、波を蹴て列を挺く。一艇、また急に之を追ふ。第一著は、海軍兵學校の名譽となり、第一高等學校は、二艇身を後れて第二著となりぬ。

壯快なる軍樂、式場の一方に起り、記念優勝旗は、海軍兵學校の選手に授けられき。大競漕はこゝに終を告げ、數萬の群衆、おもひくゝに歸途に就きぬ。

數分時の後には、琵琶湖畔、寂として人影なく、風雨の過ぎたる後の如し。(坪内雄藏)

課題 【我校の陸水運動會】 文語體

【苗代】

作例

花に背きて作を思ふ農夫の心、勤勉か、風流か、展べられたる短冊苗代に種子をおろすさま、女文字に走書するやうなり。水鏡の如く、おつる種子はしきりに小紋をゑがく。日照ること三日、水落ちて、種子むらなく芽さす。雨降ること半日、水と苗と高さ等を等しうして、共に三分を出です。更に照ること五日にして、苗寸に暢びて、緑拭へるが如し。臨めば筆執りて物書きたきやうなり。更に降ること一日、苗ますく、暢を競ひて、水これに及ばざること七分。雨の力、日の力、かはるく、染め晒して、黒きまで濃き苗は、今や數寸に及ぶ。案山子の力亦これに與れり。農夫はあつく三者の力を多として、己少しもその功に居らず。

女文字(平假名)

ト調は高き調子なり。

勇ましき歌ト調にひびきて、少女かひくしく早苗を取る。根を洗ふ童子は、苗代じりの小川に腰までぬらせり。白髪まじりの老爺をりく、少女と童子との勞を褒めつゝ、苗を運ぶ。げに治まゐる御代の民なり。(坪内雄藏)

課題 【勤勉なる農夫】 文語體

考

春、水田に種を蒔いてから、夏の炎天に至るまで、農夫の勞苦は一とほりでない。焼きつくやうな酷暑の日中に草取りをするは勿論、早魃になりはすまいか、霖雨が過ぎはすまいかと、その心配は片時も休むことがない。夜も晝も見まはつて見て、水が涸れはしないか、蝗が生じはせぬかと氣にかける。鳴子



をこしらへ、案山子を設けて、雀を追つたり、稻を刈り、家に運び、扱いだり、臼で碾いたりする辛苦は、まことに容易ではない。吾人が座つてゐて、日々にうまい米を食べてゐられるのは、全く勤勉なる農夫があるからである。

## 【神戸】

作例

神戸は攝津の國に在り。北に六甲山脈を負ひ、瀬戸内海に面す。兵庫縣第一の都會にして、人口××萬に近し。我が國開港場の一にして、謂はゆる五港の一つなり。東海道線と山陽線とはこゝに接續す。市の東北部には三宮驛あり。和田岬に物資を送るには貨物線あり。大坂に至るに

は電氣鐵道あり。港灣は湊川水路の三角洲によりて二分せられ、東に神戸港、西に兵庫を形成し、内外の船舶常に輻輳す。商業の勃興に市況の殷賑は年を逐うて著しく、大正□□年度の本港に於ける輸出額は、何億零何百何十何萬何千餘に上り、輸入は何億何千何百何十何萬何千餘圓に達せりといふ。

この地もと寂寥たる一村なりしが、慶應三年の開港以來、形勢頓に一變し、僅々五十年にして今日の盛大を致せるなり。近時湊川の流域を兵庫方面に移して、海面に砂石の流出を防げりといふ。湊川神社は別格官幣社にして、賽人常に絶ゆることなし。

賽人(御禮参リテ  
スルコト、今ハ参  
詣ノ意ニ用キル)

## 課題

## 【横濱】

文語體

横濱舊時の戸数は僅に八十七戸の小漁村であつたと、武蔵風土記に記してある。安政六年開港場と定められてから五十年ばかりで、全國第一の開港場となつた。○安政六年に、海岸通や北仲通、本町、南仲通、辨天通がまづ開かれて、元治元年には東波止場が築かれる。維新後には鐵橋の架設やら、京濱乗合馬車、電信局も出來、新聞も發刊せられ、京濱間の鐵道も全通し、瓦斯局の設置も出來るといふやうになり、明治となつてから百般の事業が起つてきた。○明治二十年に水道工事ができ、二十二年に市制を實施し、廿九年に築港が出來、三十二年七月に改正條約が實施せられて、外人の内地雜居が自由となつた。○三十四年には市域を擴張し、水道複管工事が落成した。○

その他幾多の事業が駁々として進み、今は人口が××餘萬の大都會となつた。○開港の當時は在留外國人の數は僅に四十四人であつたが、今日は△△人餘である。○開港當時の外交家であつた阿部伊勢守、堀田備中守や、井伊掃部頭等に今日の盛況を見せたなら、さぞや驚歎することであらう。

## 【夏なき里】

作例

一年暑さを信濃の山中に避けたことがある。地は輕井澤の奥で、人境を距ること一里半。山深く地幽に、寒暖計は、日中でも八十度を上らず、朝夕は、僅かに六十度を越えるのみである。三伏の暑中に、朝は緋袴を着て爐を擁するなど、は、紅塵寰中の人の

幽(奥)フカキトコ  
紅塵寰中(チリニ  
ケガレタル人間  
界)

山中曆日なし、偶  
來ニ松樹下ニ高枕石  
頭眠山中無ニ曆日  
寒露不知年(唐  
詩選、太上隱者作)

おもひもよらぬことであらう。晝は鶯のこゑを聞き、夜は蟲の音を聞く。いはゆる山中曆日なきものである。溪流ありて清きこと寒玉の如く、これを掬すれば、冷指に沁みて痛さをおぼえる。宿屋が一軒のみで、住まうてゐる人の數より、鶏の數が多いのでも、その閑寂は、推して知らるゝ。屋は、溪上に架せられてゐる。はじめに到れる夜、半夜、夢回れば、急雨の聲あるに、起つて窓を推せば、風露清うして、涼月、天心にあり。灘聲のみがひとり、天地の空寂を破つてゐた。この時の情味は今なほ忘れ得ない。

(田岡嶺雲)

課題 【箱根塔の澤】 文體隨意

参考

箱根湯本から早川の溪流を右にし、山中に入ること五丁許で塔の澤に達する。○溪流はSの字の状をしてゐる所に二橋が架けてある。入口のが玉の緒橋、奥のが千歳橋。○温泉宿は、環翠樓、玉の湯、清涼館、福住、新玉の湯、一の湯等である。○環翠樓と玉の湯とは、何れも橋側の溪流に臨み、眺望絶佳で、建築も亦壯麗である。○温泉は清らかで、無色無臭で、満身の塵を洗ふ氣がする。○驟雨のやうな溪水の音と翠緑の色が滴るばかりの山の色とは、耳目を一新する心地がする。○湯本もこの塔の澤も、須雲川の急流を利用した水力電氣の電燈を點じて、明晃々たること、不夜城のやうである。○魚類は湘南の潑刺たる鮮を運んできて、朝夕の膳に上すことができる。

驟雨(ニハカ雨、夕立) 明晃々(アカルク、テラスゴト) 湘南(湘は、實は支那の湖南省を流れる洞庭湖にそそぐ河の名、湘の字は相の水に從へる故に我國の相模の國に我が國の相模の國に馬入川をこれに南即ち大磯、平塚、小田原等一帯の地を湘南と稱してゐる)

【船に殉ぜる船長】

作例

世に忌むべきは放縱・懶惰もしくは姑息・無氣力にして責任を守らず、職務を忽せにするものなり。これに反して世に尊ぶべきは責任を重んじて職に忠なるものなり。殊に其の職に殉ずるに至つては、人間の行爲中最も神聖なるものといふべし。

隊長にして其の職を忽せにせんか、部下の數百人は犬死して、終に全軍の大敗をきたすことあるべし。醫者にして其の職を忽せにせんか、癒ゆべき病氣も癒えず、まだ命のある人も空しく死亡すべし。船に乗る人の神とも佛とも頼むはその船長なり。乗組人の生殺・與奪は、一にかかつて船長の一呼吸にあり。もしその粗忽により、誤つて人一人の命をだに失はば、責任を帯びて

引決(責チヒイテ  
自殺スルコト)

咫尺(咫ハ八寸、  
尺ハ一尺)

従容(ユツタリ、  
オチツケ)

引決する所なかるべからず、これ船長たる者の本分なり。

明治三十六年十月の末、汽船東海丸、北日本海を航しけるに、風烈しく、浪あらく、密雲空を掩うて咫尺を辨ぜず。あはれや、露船プロクレス號に突きあてられ、船體を損じて遂に沈没せり。船員乗客すべて九十七人の中、六十人は露船のボートに救はれたりしが、三十七人ははかなく溺死せり。船長久田佐助氏は迎へに來りし露船のボートを卻け、従容として身を船に縛りつけ、綱を引き、高く汽笛を鳴らしつゝ、船と共に海底に沈没せり。嗚呼壯なるかな。

東海丸の露西亞の船と衝突したるは、必ずしもその船長の罪にあらず。然れどもその責任を負ひて船に殉じたるは、これ實に義勇公に奉ずるものにして、船長たる者の龜鑑なり。眞の日